

兵庫県ボラ山1号墓発掘調査概要報告

奈良大学文学部考古学研究室

はじめに	第5章 調査成果のまとめと若干の考察
第1章 調査に至る経緯と調査体制	1. 出土遺物について
第2章 遺跡の立地と地理的環境	2. 遺構について
第3章 発掘調査の経過と遺構の調査概要	3. ボラ山遺跡と周辺の遺跡
1. 調査の経過	4. 小結
2. 遺構の調査概要	おわりに
第4章 出土遺物	(方形台状墓集成表)
1. 土器	(図版)
2. 鉄器	

はじめに

奈良大学文学部文化財学科では、2年次生の実習科目として美術工芸史実習と考古学実習を併設し、学生の指導に当たっている。考古学実習では、学内での実習に加えて、かねてより野外での調査実習の必要性を痛感し早期実現に向けて計画を立てていた。幸いにも1993年度は、兵庫県氷上郡教育委員会の協力により、同郡青垣町に所在するボラ山1号墓の発掘調査を実施する機会を得、方形台状墓の解明と当地域の歴史の復元を目的として、考古学実習の一貫として発掘調査を実施することにした。

したがって、本稿は兵庫県氷上郡青垣町沢野口塩久字ボラ山に所在する、ボラ山1号墓の発掘調査概要報告であり、1993年度奈良大学文学部文化財学科(考古学研究室)考古学実習の成果報告を兼ねている。発掘調査は、1993(平成5)年7月23日から8月9日まで実施し、その他の残務処理、現状復帰などの作業は8月31日に終了した。図面整理、遺物実測などは調査終了後、実習の授業として引続きおこなった。本書で使用した方位は、国土座標方位に基づいており、標高については東京湾の平均海面を基準とした。

本稿は、水野正好、酒井龍一、泉拓良の指導の下に、植野浩三、帆足俊文が編集をおこない、執筆は植野・帆足に加えて各整理担当者が分担し、執筆者名は文末に記した。図面整理と遺物実測などは、調査参加者を基本として、帆足俊文、青木元邦、浅田哲司、井川亮太郎、

大城美樹、沖田絵麻、河端智、桑田聡、島軒満、田島夕美子、林大智、日倉嘉代、松下佐緒里、森岡葉子がおこなった。

出土した遺物や写真、図面などは基本的に兵庫県氷上郡教育委員会が保管し、副本を奈良大学文学部考古学研究室が保管することにする。尚、本稿はあくまでも概要報告であり、内容の不備は氷上郡教育委員会が予定している本報告書によることを断っておく。(植野浩三)

第1章 調査に至る経緯と調査体制

今回発掘調査をおこなった通称ボラ山・ブラ山と呼ばれる独立丘陵は、兵庫県氷上郡青垣町沢野から口塩久にかけての圃場内に所在する。この独立丘陵の付近一帯に、1989(平成元)年度より青垣町によって工業団地造成工事が計画され、氷上郡教育委員会では事前に遺跡の分布調査・試掘を実施したところ、独立丘陵上に弥生時代末葉から古墳時代にかけての墳墓および古墳を多数確認した。その結果、丘陵の北側はやむなく記録保存を前提とした調査をおこない、その後造成することとなったが、丘陵の南側は公園として保存することになった。

今回の調査は、将来の遺跡公園化に向けて、公園予定地の北端で確認していた方形台状遺構(ボラ山1号墓)の全容を確認して基礎資料を得るためのものであり、かつ青垣町の歴史資料を得る目的で調査した。

調査は兵庫県教育委員会の指導のもと、兵庫県氷上郡教育委員会が調査主体となり、奈良大学文学部考古学研究室(代表：水野正好)が教育研究活動の一環として担当した。今回の調査にあたって北群の遺構を調査した氷上郡教育委員会の山田義三氏、徳原多喜雄氏の指導・助言の下に、以下の調査体制を編成した。

<調査体制>

調査指導 兵庫県教育委員会

調査主体者 兵庫県氷上郡教育委員会(教育長：舟川肇)

調査事務局 辻勝・山田義三・徳原多喜雄・下山隆文(兵庫県氷上郡教育委員会)

調査担当者 水野正好(奈良大学文学部教授)

調査員 酒井龍一(奈良大学文学部教授)、泉拓良(奈良大学文学部教授)

植野浩三(奈良大学文学部助手)、帆足俊文(奈良大学大学院生)

調査参加者 杉原美智久(奈良大学大学院生)、青木元邦(奈良大学文学部3回生)、浅田哲司、井川亮太郎、大城美樹、河端智、桑田聡、島軒満、田島夕美子、林大智、松下佐緒里、森岡葉子(以上文学部2回生、考古学実習生)。尚、整理作業には上記の者の他に、沖田絵麻、日倉嘉代(以上文学部2回生、考古学実習生)が加わった。

調査協力者 相原嘉之、岩橋隆浩、上垣幸徳、加賀見省一、澤田勝、篠宮正、田畑基、富山直人、平田学、宮脇薫、安田裕司(以上奈良大学OB)、三輪晃三(奈良大学大学院生)、青山ひろみ、池谷勝典、木次谷尚子、小柴治子、新本真之、渡辺典子、岡田憲一、高雄由紀子(以上奈良大学学生)

謝辞 尚、調査および本書作成にあたっては、芦田岩男、足立英昌、石崎善久、荻野正太郎、佐々木勝、下川賢司、高島信之、筒井崇史、櫃本誠一、御嶽貞義、村川義典、吉森信行の各氏と、京都弥生談話会参加の諸氏に、多大な指導と協力をいただきました。また、調査期間中の宿泊や機材の準備・保管に関しては、あまごの家、青垣町中央公民館に大変お世話になり、この他にも、多くの方々や機関の指導と協力をいただきました。記して感謝の意を表します。(帆足俊文)

第2章 遺跡の立地と地理的環境

ボラ山1号墓は、兵庫県氷上郡青垣町口塩久字ボラ山に所在する。律令体制下において氷上郡は、多紀・桑田・船井・何鹿・天田の5郡とともに山陰道8ヶ国の中の丹波国に属し、北を丹後・若狭、西を但馬、南を摂津・播磨、東を山城の旧国と接していた。ただし、丹波国は古来山陰道に属していたが、河川を通じて概観すれば、氷上・多紀郡の2郡は瀬戸内地域系の内陸部と位置付けることできる。丹波国のうち、この2郡が切り離されて、明治以降兵庫県に編入された理由がそこにあったと考えられる。

氷上郡は、丹波国の最西部、兵庫県の東北部にあたる。そのなかで青垣町は、加古川の支流である佐治川の上流域に位置し、氷上盆地の一角を占めている。青垣町の遠阪峠付近に源を発して播磨平野に注ぐ加古川は、古来「氷ノ川」と呼ばれ、当該地域が「氷ノ川」の上流にあたることから、「氷上」と称するようになったといわれる。氷上盆地は加古川と由良川上流の低地帯であり、大半は埋積谷を形成している地域である。この埋積谷に堆積した礫層は数10mにも達し、河川上流の堆積層としては非常に厚いものである。氷上盆地の山麓は、最終氷期には現在より堆積活動が活発で、山麓斜面の高度は現在より高く、低地は低い凹凸の激しい急斜面の地形であったといわれ、晩氷期以降に低地の埋積が進行して、現在の地形になったと考えられる。

播磨灘に注ぐ加古川の支流である佐治川と、若狭湾に流れる由良川の支流である竹田川とは、氷上郡氷上町石生において谷中分水界を形成している。石生は谷幅約700m、標高は海拔98mの沖積面で連続して、日本で最も低い分水界をなしている。国道175号線が国道176号線にぶつかるT字路には、「水分橋」と名付けられた小さな橋が現存しており、ここを流れる

高谷川が岨部神社の前で南北に分かれたといわれる。ただし、現在では、国道175号線が、川の争奪によって分水界となっている。こうした地域は、瀬戸内海側と日本海側をつなぐ絶好の交通路として古来より利用された。ボラ山1号墓の所在する地域は、加古川の最上流域にあたり、古代山陰道が通過し、但馬・播磨国との国境に位置する点でも重要な地域であった。

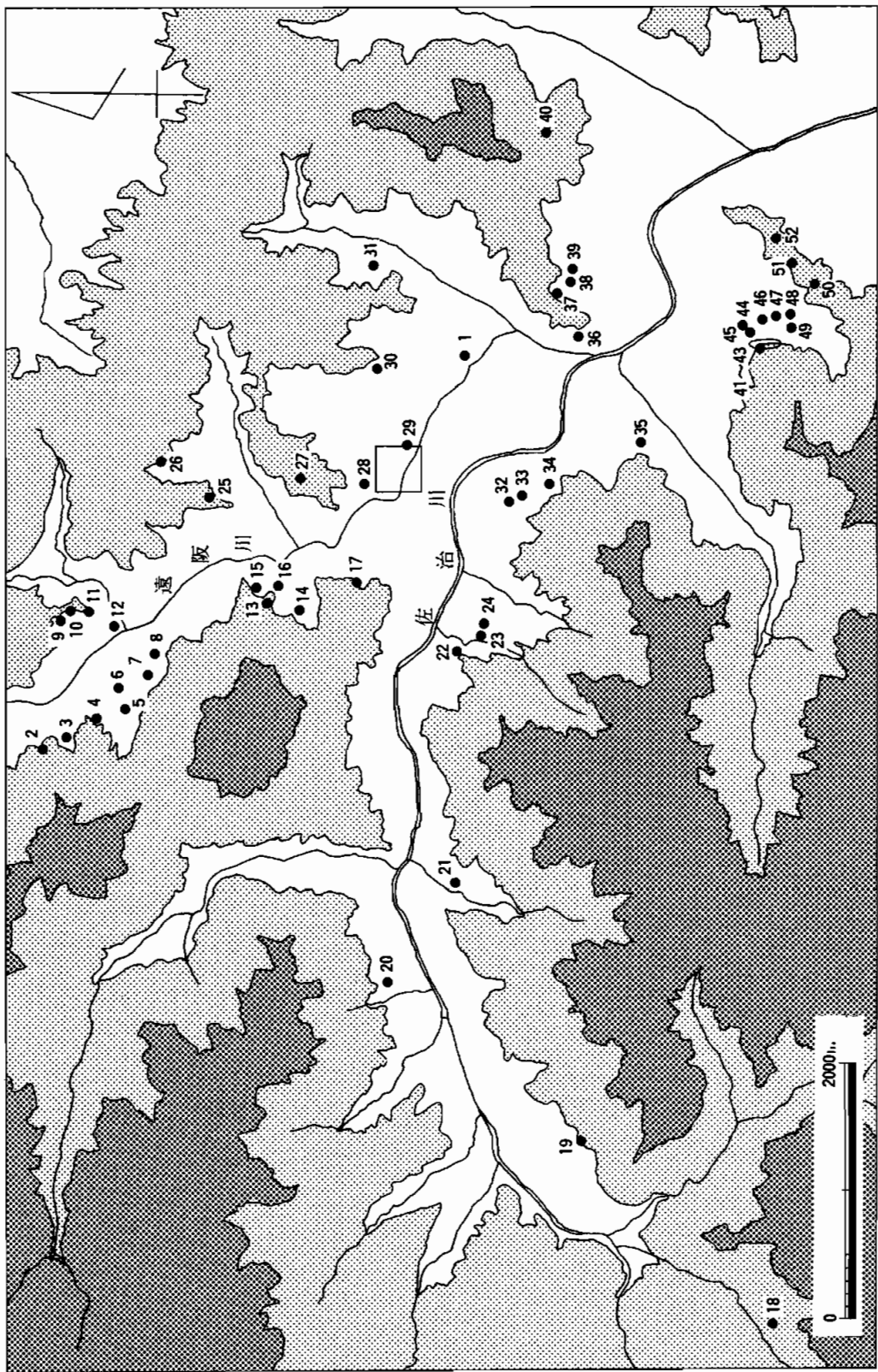
ボラ山は、かつて北方の奥塩久字矢ノ内地区の山塊からのびる細長い尾根の一部であったが、凝灰岩質の柔らかい地盤のため、遠阪川などの侵食作用や人為的な地形改変を受け続け、尾根から切り離されて独立した丘陵になったと考えられる。

ボラ山1号墓が立地するボラ山(ブラ山を含む)は、大きく3つのピーク(頂部)をもつ。北端部のピークを中心とした部分をブラ山と称し、南側の2つのピークを含む地域がボラ山と称する部分である。このボラ山は、最高所でも周囲の田園から約30m程度の比高差しかないが、周囲が平坦な水田地帯であるため、遠くから眺めると平野の中に浮かんだ島のようにみえる。また、その頂部は、青垣町の北方地域(佐治・芦田地域)がほぼ全体に見渡せる非常に眺望のきく地点である。

ボラ山の周囲、特に西方地域は、加古川最上流域の佐治川と遠阪川が合流する地域である。この周辺は現在でも低湿な沖積地をなしており、古来より水稻耕作に利用されていたようで、沢野条里と呼ばれる平安時代から鎌倉時代初頭に形づくられたとみられる条里制遺構が存在していることが知られている。(河端智・桑田聡)

第1表 ボラ山遺跡周辺の遺跡 (番号は第1図と対応)

番号	遺跡名	種別	所在地	番号	遺跡名	種別	所在地
1	ボラ山遺跡	古墳	青垣町口塩久ボラ山	27	寺内城跡	城跡	青垣町澤野谷替
2	松倉城遺跡	城跡	〃 山垣奥山	28	極楽寺跡	寺院跡	〃 〃 寺山
3	堀殿遺跡	古墳(円)	〃 〃 堀殿	29	澤野条里跡	条里跡	〃 〃 新ヶ谷
4	唐鍛遺跡	〃(〃)	〃 〃 唐鍛	30	浄土寺跡	寺院跡	〃 〃 〃
5	横敷古墳	〃(〃)	〃 〃 横敷	31	薬師庵跡	〃	〃 〃 奥塩久堂ノ上
6	上地前古墳	〃(〃)	〃 〃 上地前	32	丸山古墳	古墳	〃 〃 佐治丸山
7	西落古墳	〃(〃)	〃 〃 西落	33	丸山窯跡	窯跡	〃 〃 〃
8	天福寺跡	寺院跡	〃 〃 白石	34	佐治城跡	城跡	〃 〃 〃
9	山垣城跡	城跡	〃 〃 城山	35	慈雲庵跡	寺院跡	〃 〃 西芦田柴岡
10	鉢ノ木田古墳	古墳(円)	〃 〃 宿内	36	西ヶ谷遺跡	集落跡	〃 〃 口塩久西ヶ谷
11	東寺古墳	〃(〃)	〃 〃 東寺	37	山ノ神古墳	古墳(円)	〃 〃 田井縄山ノ神
12	堀屋敷跡	屋敷跡	〃 〃 堀の内	38	天神古墳	〃(〃)	〃 〃 天神
13	應相寺1号墳	古墳	〃 〃 中佐治應相寺	39	田井縄遺跡	集落跡	〃 〃 〃
14	〃 2号墳	〃	〃 〃 〃	40	東芦田城跡	城跡	〃 〃 東芦田小室
15	〃 3号墳	〃	〃 〃 〃	41	防ヶ谷1号墳	古墳(円)	〃 〃 西芦田防ヶ谷
16	應相寺跡	寺院跡	〃 〃 〃	42	〃 2号墳	〃	〃 〃 〃
17	代官屋敷跡	屋敷跡	〃 〃 田辺	43	〃 3号墳	〃	〃 〃 〃
18	一里跡	一里	〃 〃 大名草ゼナガ	44	ツキ山古墳	〃(円)	〃 〃 栗住野ツキ山
19	大名草たたら跡	たたら跡	〃 〃 灘谷	45	長原寺跡	寺院跡	〃 〃 西倉ノ上
20	文室たたら跡	〃	〃 〃 文室吹屋	46	空照寺跡	〃	〃 〃 山ノ下
21	松倉たたら跡	〃	〃 〃 松倉大道端	47	西倉古墳	古墳(円)	〃 〃 西倉ノ上
22	段ヶ谷古墳	古墳(円)	〃 〃 小倉段ヶ谷	48	梅ノ木畑古墳	〃	〃 〃 梅ノ木畑
23	光明寺跡	寺院跡	〃 〃 ボウヶ谷	49	山田ノ上古墳	古墳(円)	〃 〃 山田ノ上
24	段ヶ端古墳	古墳	〃 〃 段ヶ端	50	栗住野城跡	城跡	〃 〃 下山
25	鉢ノ木田古墳	〃	〃 〃 山垣鉢ノ木田	51	極楽寺跡	寺院跡	〃 〃 〃
26	早坂古墳	〃	〃 〃 早坂	52	下山古墳	古墳(円)	〃 〃 〃



第1図 ポラ山遺跡周辺の遺跡

第3章 発掘調査の経過と遺構の調査概要

1. 調査の経過

前章で述べたように、氷上郡教育委員会が1991(平成3)年度に、丘陵のほぼ中央を南北に縦断する試掘溝によって、方形台状墓(ボラ山1号墓)にともなうと考えられる東西方向の溝を、約10mの間隔で確認していた。今回の調査では、試掘溝内における2条の溝のほぼ中間点に原点O(0.0)を定め、その原点をもとに、東・西・南・北の四方向に任意の基準点(E・W・S・N)を定め、局地座標系を設定した。調査はこの局地座標系で進行し、調査終了後に、すべて国土座標の数値に変換した。ついで、墳丘の中心部を通る南北方向の畦とそれに直行する東西方向の畦を設定し、2本の畦によって区分された4地区を北西地区から反時計回りに、それぞれA・B・C・D地区と呼称した(第2図)。

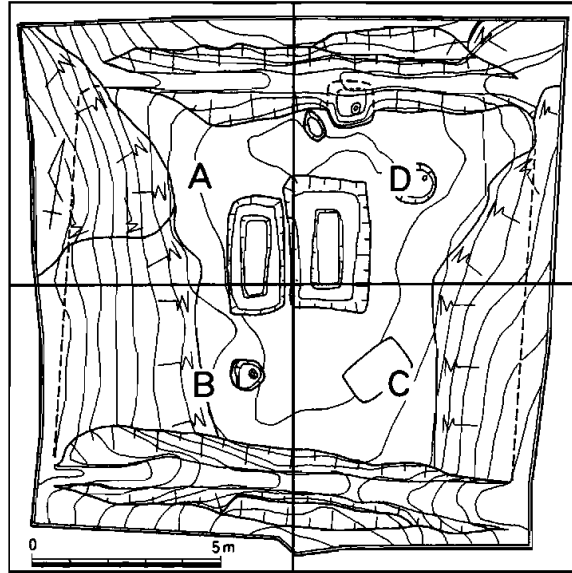
次に表土層の除去を開始した。この段階で墳丘の南北の溝の輪郭が確認できたため、溝の長軸方向に畦を設定した。表土層の除去後に、墳丘面と墳丘裾部の確認の作業に取りかかった。調査の結果、墳丘には盛土が施されていることがわかったが、盛土と同質の土が裾部に流入していたため裾部の確認は困難を極め、この作業にはかなりの日数を要した。それと並行して、北側溝と南側溝の掘り下げをおこなった。

今回の調査では、周溝内埋葬の確認の作業と手段を重視したため、溝内の畦を縦方向に設定した。溝内の堆積と埋葬の相対的な時間差を解明する目的をもって調査に取り組み、精神的に縦断面の精査をおこなったが、予想に反して埋葬施設などの存在は確認できなかった。溝は、当初の予想通り墳丘全体をまわる周溝ではなく、墳丘の北側と南側をそれぞれ直線的に掘削して、区画整形するものであった。溝内の畦の断面を記録した後、北側溝と南側溝は完掘した。遺物が出土した場合はそのつど出土地点を記録し、必要なものは写真撮影をおこなった。

次に墳丘面を精査して、埋葬施設およびその他の遺構の検出作業をおこなう。B地区とD地区では埋土に多量の炭を含む土坑(SK1・3・4)を検出し、SK4からは中世の瓦器の細片が出土した。試掘溝で確認していたSK2からは、壺の底部(図版9-13)が出土した。埋葬施設は、墳丘のほぼ中央部に2基(1号主体部・2号主体部)と、その南東部に1基(3号主体部)の計3基を検出した。その後、1・2号主体部に畦を設定して主体部の掘り下げをおこなう。両主体部では木棺の痕跡を確認し、1号主体部の埋土からは破碎供献したと考えられる小型の壺(図版9-10)が出土した。主体部から出土した鉄斧、鍬、鉄鎌(15~19)は出土状況を記録して、写真撮影後に取り上げた。主体部内の下段部、木棺部分にあたりと考

えられる埋土は、水洗するためにすべてを保管した。3号主体部は、墓壇内の調査はおこなわず、輪郭のみ記録して保存することにした。

最後に主体部および遺跡全体の完掘写真を撮影し、全体の測量図の作成をおこなった後、遺跡公園化に向けて埋め戻しをおこない、調査をほぼ終了した。後日、植野浩三、青木元邦、田島夕美子、松下佐緒里、高雄由紀子は現地へ赴いて、保管しておいた主体部の埋土の水洗作業をおこなったが、ガラス玉などの遺物は含まれていなかった。(帆足俊文)



第2図 ボラ山1号墓の調査区割り図

2. 遺構の調査概要

(1) 墳丘 (図版6)

ボラ山1号墓は、ボラ山の南支尾根の付け根部分、北尾根からの傾斜が緩くなる地点に位置する。尾根に直交する2条の溝を約10mの間隔で掘り、墳丘の整形をかねて墓域の南北を区画する。同時に、東西の裾部を削り出し、墳丘上に盛土して台形状に整形した方形台状墓である。墳丘の規模は、東西長11.2m、南北長10.3mで、溝底部からの高さは0.3~0.7mである。墳丘頂部の標高は143.3mを測る。

地山は、赤色粘盤岩で白色粘質ブロックを多く混入する。地山直上の厚さ約20cmの第3層は、墳丘の盛土と考えられる。赤色の礫と地山のブロックが混入する暗赤褐色土であり、部分的に地山と色調が似ている。墳丘の裾部にあたる地山の東西部分を掘削し、その残土を地山上に盛土して、墳丘を整形したと理解できる。さらにその上に、茶褐色の自然堆積層(第2層)、および表土層(第1層)が堆積している。

墳丘の南北両辺は溝によって区画され、範囲は明確に限定される。東西方向の断面は、いわゆる台形状を呈する。東西の斜面は、裾部を地山の削り出しによって整形しているが、土砂の流出が著しい部分もあり、現状ではやや不整形になる。

台状部のほぼ中央には、主軸が南北方向の墓壇が2基(1号主体部・2号主体部)並ぶが、全体的にやや北よりの位置になる。さらに両主体部から南東1.2mの地点に、主軸が北東-南西方向の小墓壇(3号主体部)が1基あり、その他に、壺の底部(図版9-13)が出土した土坑

1基(SK2)と、後世の土坑3基(SK1・3・4)が存在する。

遺物は土器が全てであり、A地区から高杯が2点(図版9-4・7)、C地区から高杯が1点(5)、それぞれ墳丘上の表土層(第1層)および第2層から出土している。(森岡葉子)

(2) 溝(図版7)

2条の溝が、尾根に直行して、墳丘の北辺と南辺に約10m間隔で存在する。墳丘の区画と整形をかねて、いずれも地山をほぼ直線的に掘削しており、南北方向にはまわらずに、東西端部で収束する。

北側溝 尾根に直行する溝であり、墳丘の北部を区画する役割をもつ。墳丘北部の整形をかねて、地山をほぼ直線的に掘削している。西限が明確に検出できたのに対して、東限はやや不明確に収束する。東西の確認全長は10.65mである。南北の中心線線上における幅は1.76m、深さは0.72mであり、横断面は、「V」字形に近い「U」字形を呈している。全体として深くしっかりした掘り込みであり、底部は東西にほぼ水平になる。

溝内の土層は、木の根によると思われる攪乱が随所にみられるが、比較的水平に堆積しており、ほぼ自然流入によるものと考えられ、土色によって大きく2つに分けることができる。下層(第7~11層)は地山に近い橙褐色であり、上層(第2~6層)は暗茶褐色もしくは灰褐色で、中央部では複雑に薄く堆積する。溝は、方形台状墓にともなう埋葬施設の確認のために精力的に土層断面の精査をおこなったが、存在は確認できなかった。溝中央部のやや東側に土坑(SK1)が存在するが、中世~近世のものと考えられる。

遺物は、溝内の西側第10層から高杯が1点(図版9-3)出土している。また、壺(14)は試掘調査の段階で、畦の東側底部付近より出土した。(浅田哲司)

南側溝 尾根に直交する溝であり、墳丘南部を区画する役割をもつ。墳丘南部の整形をかねて掘り込まれているが、東・西端部はやや不明確である。東西の確認全長は11.18mである。南北の中心線線上における幅は1.4m、深さは0.26mであり、横断面は、「U」字形を呈している。深さは北側溝に比べて浅めであり、底部は北側溝と異なり、地形に即して東西にゆるやかに下っている。

溝内の土層は5層に分層され、攪乱を除く各層には大きな変化はみられない。比較的水平に堆積しており、ほぼ自然流入によるものと考えられる。第16層は西側部分のみに存在し、地山直上に堆積している。溝の中央部では、第15層の上に第14層が、第14層の上に第13層が凹状に堆積している。第15層は東西ともに端部近くで第12層と接している。第13層は他層に比べて薄く、第12層はほぼ均一の厚さで溝全体に広がっているが、東側部分において攪乱がみられる。

遺物は、溝内の西側第4層から、高杯脚部が1点(図版9-6)と壺の口縁部が1点(12)、西側第14層から、高杯の口縁部1点(1)と高杯脚部1点(8)が出土している。(大城美樹)

(3) 埋葬施設 (図版 8)

ボラ山 1 号墓の埋葬施設は 3 基存在する。台状部のほぼ中央のやや北側寄りに、尾根の稜線にはほぼ平行して、1 号主体部と 2 号主体部が並列して存在する。さらに中央から南東の地点に、小規模な 3 号主体部が存在する。

1 号主体部 墳丘の南北方向の中心線よりやや東側に位置し、墓壇の西側肩部が、ほぼ墳丘の南北方向の中心線上にのる。2 号主体部と規則的に並列しており、両者の掘方肩部はわずか 0.2m の間隔である。主軸の方位は、N9°W である。隅丸長方形の掘方を有し、側壁はすり鉢状にやや膨らみをもって逆台形状になり、底部は平坦につくる。掘方は、検出面で長辺 3.45m、短辺 2.10m、深さは 1.10m である。

墓壇は、盛土上面より切り込まれており、盛土と地山を掘り込んでつくられている。墓壇内の土層と、底部から出土した鉄器に偏平な面をもつ木質材が付着していることから判断して、1 号主体部には箱形木棺が埋葬されていたと考えられる。

墓壇内の土層は 10 層に分層できる。基本的に棺外の埋土と考えられる第 12・13・14 層、棺内と推定される第 8・9 層、および棺上の第 6・7 層である。第 12・13・14 層は第 8・9 層と比較して砂礫を多く含み、固く締っており、堆積も自然流入のあり方は示さない。逆に第 6～9 層はすり鉢状に堆積し、木棺の腐食・崩壊後の、木棺内部への埋土の流入のあり方を示している。第 10 層 (明橙褐色粘質土) は 3～4 cm と薄く、部分的に赤色顔料の混入を認めるため、棺床の可能性が高いと判断できる。遺物が出土する高さもこれに準じている。第 11 層は平均して約 10cm の厚さを認めるため、床板腐食部の可能性をもつ。木棺推定部は北・東・西側は直立して明瞭であるが、南側は傾斜しておりやや不正確である。木棺の規模は、棺の痕跡から推定すると、長辺 1.94m、短辺 0.59m となる。

出土遺物には土器と鉄器がある。土器は小型壺 (10) の破片が木棺痕跡の東西から各 1 点ずつ、第 13 層の直上で出土しており、埋葬時に破碎供献されたと考えられる。また第 6 層の上部付近から、高杯 (2) と器台口縁部 (9) が出土し、こちらも供献として墓壇上に置かれていた可能性がある。鉄器は、木棺推定部の北西隅で、底部から約 10cm 程上部から、鉄斧 (図版 9-15) と 鉈 (16) が 1 点ずつ、刃先を北側にして並列して出土した。両者は、棺床と考えている第 10 層の直上についている。鉄器の下面には、鏝とともに、扁平な面をもつ木片が付着しており、木棺材の一部と考えられる。(鳥軒満)

2 号主体部 1 号主体部の西側に、墳丘の南北方向の中心線を挟んで、1 号主体部と平行して存在する。主軸の方位は、N10°W である。隅丸長方形の掘方を有し、側壁はやや傾斜をつけて逆台形状を呈するが、部分的に凹凸をもつ。底部は平坦につくる。掘方は、検出面で長辺 3.10m、短辺 1.52m、深さは 1.00m である。

墓壇は、盛土上面より切り込まれており、盛土と地山を掘り込んでつくられている。墓壇

内の土層と、底部から出土した鉄器に偏平な面をもつ木質が付着していることから判断して、1号主体部と同様に箱形木棺が埋葬されていたと考えられる。

墓壇内の土層は、基本的には1号主体部と同様であり、棺内・棺外と予想できる土層に分かれる。第4層は棺外の埋土であり、第3層と質的に異なる。第1・2層は上部から「U」字形に堆積し、木棺の腐食・崩壊後の、木棺内部への埋土の流入のあり方を示しており、木棺特有の土層堆積と判断される。木棺推定部は、4辺とも直立して明瞭である。木棺の規模は、棺の痕跡から推定すると長辺1.98m、短辺0.58mとなる。

出土遺物には土器と鉄器がある。土器は主体部中央部埋土の第1層から小型壺(図版9-11)と、高杯脚部片(5)が出土している。また鉄器は、木棺推定部の北側壁から約20cm、墓壇底部から約10cm上部において、鈍(18)と鉄鏃(19)が出土し、木棺推定部のほぼ中央から鈍(17)が出土した。それぞれ、北、北西、南東に刃先を向けて出土した。鉄器の下面には、錆とともに偏平な面をもつ木片が付着しており、木棺材の一部と考えられる。(田島夕美子)

3号主体部 1号主体部の南東1.2mに位置する。主軸の方位は、N43°Eであり、尾根の稜線に対して、約43°東にふれている。掘方は、検出面で長辺1.72m、短辺1.09mである。遺跡保存を前提とした調査のため、墓壇内の掘り下げはおこなわずに、掘方の検出のみで保存したため、その他の詳細は不明である。(帆足俊文)

(4) 土坑

SK1・3・4の埋土には炭が認められる。SK1・3からは出土遺物は無いが、SK2からは壺の底部が、SK4からは中世の瓦器細片が出土している。SK1・3・4は後世の炭焼きの土坑の可能性が高い。土坑番号は図版6に記している。

SK1 墳丘の北辺の傾斜している面に位置し、直径約1mの正円形を示している。深さは0.7mである。出土遺物は無く、埋土に多量の炭が混入していたため、後世の炭焼きの土坑の可能性が考えられる。

SK2 1号主体部の北側1mに位置し、楕円形で長軸0.84m、短軸0.52mである。試掘調査の段階で検出されていた。正確な深さは不明だが、約0.15m程であり、他の土坑と比べてかなり浅い。調査時に後世に入り込んだと考えられる壺の底部(図版9-13)が出土した。

SK3 1号主体部の北東0.6mに位置し、やや楕円形で長軸0.64m、短軸0.54m、深さは0.3mである。出土遺物は無く、埋土に多量の炭が混入していたため、後世の炭焼きの土坑の可能性が考えられる。

SK4 2号主体部の南1.2mに位置し、ほぼ正円形で直径0.42m、深さ0.45mである。埋土に多量の炭が混入しており、瓦器の細片が出土した。SK1・3と同様に、後世の炭焼き土坑の可能性を考えておきたい。(帆足俊文)

第4章 出土遺物

1. 土器(図版9)

出土土器は、少量の瓦器細片と中世以降の遺物を除き、弥生土器または古式土師器であり、総数25点である。土器片の中で図化可能なものは13点であるが、この中には同一個体のものも含まれる。土器の種類は、壺・鉢・高杯・器台であり、全体の形態のうかがえるものは少なく、調整も表面が摩滅して不明なものが多い。出土地点は図版6に記している。

1は高杯、もしくは台付鉢の口縁部であり、南側溝の西側第14層からの出土である。口縁部は屈曲して上方に立ち上がり、複合口縁形を呈している。口縁端部は丸い。底部は欠落しているが、全体的にやや浅めの形態をとると思われる。調整は不明である。色調は、他の土器の褐色系統とは異なる白褐色系統であり、胎土には、白色・黒色の石粒を多く含む。

2は高杯の杯部であり、1号主体部埋土第6層からの出土である。口縁端部は失われているが、1の高杯に比べてやや不明瞭な複合口縁形を呈している。杯部はやや深めの形態をとる。調整は不明である。

3は高杯であり、北側溝の西側第10層からの出土である。杯部の底部および脚部の一部を残す。杯部・脚部ともに調整は不明である。脚部の径は2.4cmと小さく、中心部には径3mmの棒状工具による刺突状の円孔がある。

4は台付鉢か小型の高杯の脚部であり、A地区の墳丘裾部(第1層)からの出土である。脚部が「ハ」の字形に短く開き、端部は丸くなる。内面はハケ目の後磨いている。その他の調整は不明である。

5は高杯の脚部であり、C地区墳丘上第3層と、2号主体部埋土第1層から分かれて出土した。ほぼ垂直に下り、裾部に向かって緩やかに開いている。内外面とも調整は不明である。

6は高杯の脚部である。南側溝の西側第4層から出土した。ほぼ垂直に下った後、裾部に向かって緩やかに開く。内部上方には絞り目が残るが、内外面ともに摩耗が著しく、その他の調整は不明である。

7は高杯の杯部であり、A地区の墳丘裾部(第1層)からの出土である。4とはほぼ同じ地点から出土している。1・2の高杯同様、口縁部で屈曲して上方に広がり、口縁端部は丸く仕上げられる。杯部はやや浅めであり、内外面の調整は不明である。

8は高杯の脚部であり、南側溝の西側第14層から出土した。7と同一個体の可能性が高い。柱状部よりゆるやかに広がる。下部には、径1.2cmの円孔が配されており、3方の可能性がある。調整は、脚部外面はヘラ磨き、内面にはヘラ削り痕跡をわずかに残す。胎土は1と同じ

く多数の白色・黒色の石粒を含む。

9は口縁部の開いた形態から器台と考えられ、1号主体部埋土第6層からの出土である。口縁部外面には、不明瞭な約6本の擬凹線文が施されている。調整は不明である。

10は小型の壺であり、1号主体部埋土第13層上面で、木棺痕跡の東西から出土した。埋葬時に破碎供献されたと考えられる。口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部はわずかに立ち上がり、丸く仕上げる。体部は球形状に丸みをもつ。口縁部に径約5mmの穿孔が施されているのが特徴的である。

11は小型の壺であり、2号主体部埋土第1層からの出土である。口縁端部は失われている。胴部がやや張る器形で、底部は平底である。内外面ともに調整は不明である。

12は壺の口縁部と思われ、南側溝の西側第4層からの出土である。口縁端部は上下方向に肥厚させており、外面には不明瞭な4本の擬凹線文がめぐる。調整は不明である。

13は壺の底部であり、墳丘北辺の小土坑(SK2)より出土した。横方向に大きく開く体部に繋がると考えられ、底部は小さめの平底となる。底部外面にはわずかにハケ目の痕跡を認めるが、その上を磨いた可能性がある。内面の調整は不明である。

14は壺であり、試掘調査の段階で北側溝の底部、畦付近より出土した。頸部はやや細く、口縁部は急激に開く。口縁端部は上下方向に厚く引き出して面をもたせている。外面には5条の擲描波状文を施した後、渦巻状の浮文を連結させて「S」字状にしたものを6ヶ所に配している。調整は、外面に縦方向のハケ目を施した後、丁寧な縦方向のヘラ磨きをおこなう。体部内面は横方向の細いヘラ削りを施している。口頸部内面は下半が縦方向の荒いヘラ磨きであり、上半が横方向の丁寧なヘラ磨きをおこなう。口縁端部付近は内外面ともにナデ調整である。色調は内外面ともに淡い橙褐色を呈している。(井川亮太郎・林大智)

2. 鉄器(図版9)

出土した鉄器はいずれも埋葬施設からの出土である。1号主体部から袋状鉄斧と鉈が1点ずつ、2号主体部から鉈が1点と鉄鏃2点が出土した。出土地点は図版6・8に記している。

15は袋状鉄斧であり、1号主体部からの出土である。全体形は長方形を呈し、先端部の角は隅丸形になる。刃部は斜めにつくる。袋部は鉄板を楕円形に折り曲げてつくっている。袋部の端部は1cmほど折り曲げており、段をなしている。袋部から刃部にかけては直線ではなく、やや内反りになる。刃部から6.1cmのところまで偏平な面をもつ木片が錆を吸着して部分的に残り、木棺材の一部の可能性をもつ。全長10.5cm、刃部幅3.7cm、同厚さ0.4cm、袋部内径2.5×1.3cm、同外径3.2×1.9cmを測る。

16は鉈であり、1号主体部からの出土である。長めの長方形を呈し、刃先は細く尖り錆を有する。刃先部から約2.2cmのところまで反りあがっている。先端部の断面は扁平三角形に

ちかく、基部の断面は長方形である。片面全体に扁平に木片が付着しており、木棺材の一部の可能性もある。残存長8.2cm、幅0.7～0.8cm、厚さ0.3cmを測る。

17は鉄鏃または鉄剣であり、2号主体部からの出土である。先端部と茎端部が欠損している。鏃身は角をもち、先端に向かって直線的にのびており、先端は尖っていたと思われる。鏃身部の断面はレンズ状であるが、鏃があったと思われる。両面に木質が付着しており、16の付着状態と似ている。残存長8.3cm、身部幅2.25cm、同厚さ0.3cmを測る。

18は鈍であり、2号主体部の出土である。先端部と基部がやや欠損している。先端部から約3cmのところまで反りあがっている。先端部の断面は「U」字形にややくぼみ、基部の断面は長方形である。片面及び側面に木片が付着しているが、15や16ほど明瞭ではない。残存長8.7cm、幅1.0cm、厚さ0.2cmを測る。

19は鉄鏃であり、2号主体部からの出土である。先端を欠く、有茎柳葉式の鏃であり、17の形態とは基本的に異なる。茎部の断面は正方形を呈し、鏃身部の断面は薄くて平らになる。鏃身部の片面には点々と木片が付着しており、茎部には木皮状のものが巻き付けられていた痕跡を残している。残存長12.9cm、身部長10.4cm、同幅3.9cm、同厚さ0.15cm、茎部幅0.4cm、同厚さ0.4cmを測る。(松下佐織里)

第5章 調査成果のまとめと若干の考察

1. 出土遺物について

(1) 出土土器の特徴と所属時期

ボラ山1号墓の出土土器は量的に少なく、かつ表面の摩耗が著しいため、所属時期などの確実な判定は難しいが、中には特徴的な土器も存在するため、以下その検討をおこなう。

1・2・7の高杯の特徴である複合口縁形やそれに近似する形態のものは、丹後や但馬地域に多く存在し、編年的には弥生時代終末(V-4)期頃にみられる。またこれらの高杯口縁部の大きく開く特徴は、畿内庄内式の様相と共通している。同様の形態のものは、兵庫県豊岡市本井墳墓群、近くでは兵庫県氷上郡春日町七日市遺跡などで出土している。

10の壺は、複合口縁形を呈し、口縁端部は外反り気味で、胴部は球形に近く、丹波・丹後地域の編年の弥生時代終末(V-4)期に位置付けられる。高杯と同様に、庄内式併行期が妥当であろう。11の壺は、同様の形態のものが京都府綾部市青野西遺跡、野田川町寺岡遺跡、七日市遺跡などで出土している。12の土器は、口縁端部が上下方向に肥厚しており、丹後地域の編年の弥生時代後期(V-1・2・3)頃の特徴に通じる。これが正しければ、他の出土土器より少し時代がさかのぼる可能性がある。外面の擬凹線文は、9と同様に日本海側の影

響を受けたものと思われる。

14の壺は、櫛描波状文とS字状浮文を施したものであり、S字状浮文類例は大阪府美園遺跡、安満遺跡、国府遺跡、兵庫県吉福遺跡、石川県竹松遺跡などで多数出土している。畿内で多く出土しており、時期も一致することから、ボラ山1号墓出土のS字状浮文土器は、畿内からの搬入品と考えられる。特に美園遺跡出土の土器は、浮文は異なるが口縁部や波状文が当遺跡の土器と類似しており、このことから畿内からの影響が裏付けられる。ちなみに、S字状意匠はスタンプ文や銅鐸の渦文などにも類似の例があり、それらとの関連も指摘される。以上の様な点から、ボラ山1号墓の出土土器は、時期的には弥生時代終末期ないし庄内式併行期に落ち着くと考えられる。全体的に播磨などの瀬戸内地域系の土器はみられず、日本海側の影響を受けた土器が多いのが特徴である。

次に、ボラ山1号墓から比較的近距离に位置する氷上郡春日町七日市遺跡の土器と比較する。七日市遺跡は、旧石器時代から古代に至る大規模な複合遺跡であり、丹波地域の遺跡を考える上での基準資料を提供してくれる。特に集落跡から多量の弥生土器が出土しているため、当地域の編年基準となる土器資料といえることができる。

ボラ山1号墓出土の1・2・7の高杯は、七日市遺跡編年Ⅵ期に相当する。七日市遺跡編年Ⅵ期は、丹波・丹後地域の第Ⅴ様式後半から庄内式併行期に該当する時期である。特に、1・7は、Ⅵ期と次のⅦ期への移行期のものと考えられる。また、これらの高杯の口縁部が大きく開く特徴は、庄内式の様相を呈しているといえる。他に、七日市遺跡編年Ⅵ期の特徴は、日本海文化圏の特徴である擬凹線文の発達、口縁部を幅広く飾ること、複合口縁の定着などがあげられる。ボラ山遺跡では、9・12の土器は擬凹線文、14の土器は口縁部に装飾があり、複合口縁は前述の1・2の高杯、10の壺にみられる。七日市遺跡の土器様相は、七日市遺跡編年Ⅳ期までは「南」からの影響、Ⅴ期になると一変して「北」からの影響が強まるということが報告されている。ボラ山1号墓は、すぐ近くに瀬戸内海水系の佐治川が流れており、地理的にみると瀬戸内文化圏であるが、出土土器からは日本海側の影響を受けていると考えられる。七日市遺跡Ⅴ期における南北の影響の逆転は、ボラ山1号墓の土器様相を考える上で納得のいくものであり、同様の变化の中でとらえることができよう。

以上のように、七日市遺跡の出土土器からボラ山1号墓の土器を考えた。弥生時代終末期から庄内式併行期においては日本海側の影響が強いと判断できたが、14の壺の例もあり、今後、当地を含めた丹波・丹後・但馬地方との詳細な検討が必要であろう。(井川亮太郎)

(2) 台状墓出土の遺物について

ここでは、一般に近畿地方とその周辺地域の台状墓から出土する遺物の量的な比率について概観し、ボラ山1号墓を考える資料にしたい。巻末の集成表をもとにして、遺物の種類別に、主体部から出土した遺物の総数と、出土した主体部数を合わせてグラフ化した(第2表)。

さらに参考として、主体部外出土の遺物についても同様に、その出土総数と、出土した台状墓数とを合わせてグラフ化した(第3表)。

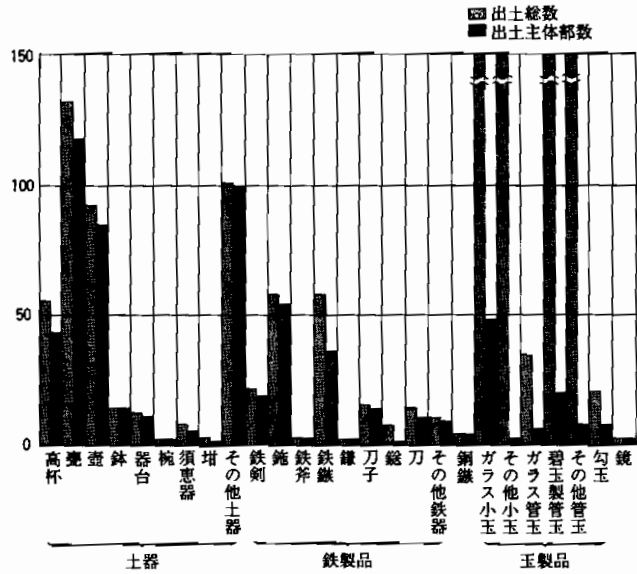
台状墓の出土遺物には、主に土器・鉄器・玉類があげられるが、平均的に主体部内・外どちらにおいてもその出土例は非常に少ない。

主体部内の遺物についてみてみよう。第2表では、玉製品の出土数が非常に目立っている(ガラス製小玉6887個以上、碧玉製管玉56

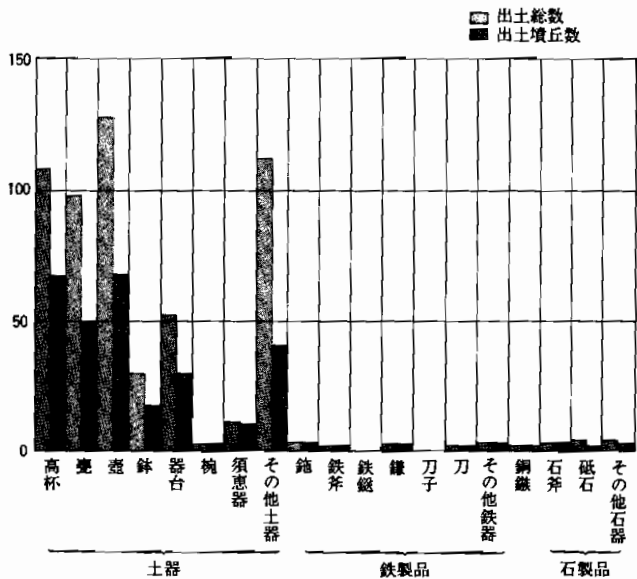
0個以上)が、これは1遺跡からの出土量が多いため(三坂神社墳墓群2772個、香住門谷墳墓群1107個など)で、出土主体部数で示されるように、出土例としてはあまり多くないといえる。次に、土器が数量的に目立つ。出土数・遺跡数ともに、甕・壺・高杯の出土頻度が高く、その他の土器は少量である。ただし、土器の表中の数値は、必ずしも完形品の個体

数を示すものではなく、グラフ化に際しては機械的に数量1としてカウントしており、重複したものも含まれる。しかし、通常1遺跡からの出土量が少量なことを考えると、大幅な誤差はないと考えられ、傾向的には矛盾しない。その他、主体部内出土の遺物では、鉄製品の副葬があるが、これは次項で示す通りであり、副葬される鉄器の種類には大きなばらつきがあることがわかる。

第2表 主体部内出土の遺物と主体部数



第3表 主体部外出土の遺物と台状墓数



主体部外出土の遺物では、主体部内と同様に土器の比率が高い。壺・高杯・甕の3種の比率が高いが、主体部内に比べて壺が増加し、甕が減少していることがわかり、器台・椀類もやや増えている。このことから、甕は主体部内外で出土するが、比較的主体部内に多く副葬されるといえる。壺は内外どちらかに大きく偏ることなく出土しているが、主体部外では器台が増える傾向があり、両者の供伴関係も考慮されなければならない。さらに高杯は、主体部内外ともに多くの出土を認め、他の器種とともに墳墓において多用されていたことがうかがえる。その他主体部外出土の遺物には鉄器・石製品の出土もあるが、量的には微量であり、純粋な原位置ではなく、後世の攪乱などの行為で移動した点を考慮する必要がある。また、表中には須恵器をあげているが、時代的に後出のものであるため、考察からは除外した。

以上のように、大まかではあるが、出土遺物の全体的な傾向を指摘した。ボラ山1号墓での出土状況は、甕が出土していない点が相違するが、高杯・壺の割合が多い点は共通し、その他の少量の土器のあり方は、周辺地域と軌を一にしている。玉類は出土していないが、北群においては、ガラス製の小玉と管玉が検出されている。(田島夕美子・日倉嘉代)

(3) 台状墓出土の鉄器について

ボラ山1号墓では、1号主体部からは袋状鉄斧が1点(図版9-15)と鉈が1点(16)、2号主体部からは鉄鎌が2点(17・19)と鉈が1点(18)出土した。ここでは周辺地域の類似した遺構から出土した鉄製品のセット関係について整理し、ボラ山1号墓の解釈の資料にしたい。

丹波・丹後・但馬地方の、弥生時代から古墳時代にかけての丘陵にみられる墳墓の出土鉄器は、大きく工具、武器、農具に分けられる。弥生時代中期から後期にかけて出土数が最も多くなる鉈・鉄鎌は、出土遺跡数が各時代の中で最も多く、弥生時代後半になると刀子・鉄剣と鉄刀が存在し、少量ではあるが鉄斧がみられるようになる。鎌、鉈先などの農具は古墳時代になってからみられる。

巻末の集成表をもとに、鉄器を出土した遺構内のセット関係をみると第4表のようになる。集成した597(ボラ山遺跡を除く)の埋葬施設の中で、鉄器を出土したのは108であり、遺物の遺存状況も考慮せねばならないが、あまり多くない。鉄器を出土した場合でも、1基の埋葬施設から1点のみ出土した遺構が圧倒的に多く、全体の64%を占め、ついで2点出土した遺跡が20%となり、3点以上出土した遺構は10%と、ごく僅かである。もちろん鉄器の有無や出土点数の違いのみで、被葬者の優劣や当時の階層・階級関係を論じることはできないが、鉄器の副葬が僅少なことから判断して、鉄器はかなり重要な利器であったことが推定できる。

出土鉄器の組合せは、1基の埋葬施設から1点のみ出土した場合は鉈が多く、ついで鉄鎌、鉄剣、刀子、鉄刀の順になる。2点出土した場合は鉈と鉄鎌を組み合わせる例と、鉈のみが2点出土する場合が最も多い。その他はほぼ同数になるが、鉈とセットになる場合が多く認められ、1点のみ出土した場合と同様に鉈が副葬品として利用されることが多い。遺構の枠を

はずして、鉄器の出土量を延べ数でみた場合、鍔が32%、鉄鏃が25%、鉄剣が12%、刀子が9%となり、副葬品頻度に比例している。その他、1基の埋葬施設から3点出土した遺構が11例あり、これも鍔と鉄鏃が加わる比率が高い。それ以上の点数の鉄器を副葬する例は稀である。

ボラ山1号墓出土の鉄器の組合せは、1号主体部が鍔と鉄斧、2号主体部が鍔と鉄鏃2点であった。周辺の遺跡での鉄斧の出土例は極めて少なく、1号主体部と同様に鍔と鉄斧がセットになって出土した例は、1例のみである。2号主体部の組合せは、点数を考慮しなければ7例とやや多い。鍔、鉄鏃、鉄剣などが副葬される例は多いが、複数の鉄器がセットで出土する場合には、組合せの規則性はあまり認められない。ただ、鉄器が複数出土した場合には、工具と武器という組合せが多い傾向もよみとれる。(松下佐緒里・森岡葉子)

第4表 台状墓出土鉄器の組合せ
(1点出土のものは出土埋葬施設数を表す)

	鍔	鉄鏃	鉄剣	刀子	鉄斧	鉄刀	その他	埋葬施設合計
1点出土	34	10	10	6	1	4	4	69
2点出土	①		①					2
	②							2
	①				①			1
	①	①						5
		①		①				1
		①	①					2
		②						5
			②					1
			①			①		1
							②	1
3点出土	①	②						2
	②			①				1
	①		①	①				1
		③						2
		②	①					1
		②		①				2
		①		①			①	1
4点出土	①	②				①	②	1
	①	②				①	①	1
5点出土	①					④		1
6点出土	①	④	①					1
		③		②		①		1
7点出土						⑦		1
合計	47	36	18	13	2	13	17	108

2. 遺構について

(1) ボラ山遺跡の特徴

ボラ山1号墓が立地する丘陵上には、1号墓の他に多くの台状墓・埋葬施設が検出されている(図版5参照)。1号墓以外については、後日報告書が刊行される予定であるため、詳細はそちらに譲るが、遺跡全体の調査成果と概要をまとめると以下のようになる。

遺跡が立地する丘陵は大きく3ヶ所の頂部をもち、それぞれの地形に規制されて遺構が築かれている。最北端の頂部にはボラ山古墳が存在した。続いて丘陵の最高所となる地点には、多くの遺構が存在し、当遺跡の中心になっている(北群)。その南東に延びる鞍部続きに第2の高所があり(中群)、最後に1号墓が立地する南側の低丘陵がある(南群)。それぞれの概要は以下の通りである。

北群：丘陵の最高所を中心にして、北側と西側の平野部に延びる尾根にかけて8基の台状墓が存在する。これらは、それぞれ1、2基の木棺または土壙をもち、斜面部では階段状にテラスをつくり、埋葬施設を設けるものもある。最高所の5号墓からは、特殊壺形土器と土器・鉄器・玉類が出土している。

中群：南側の斜面部分をテラス状に造成して、4基の墳墓を築いている。13号墓は木棺

2基と土壙1基をもつ。その東の5号墓は、尾根に平行する幅1m以下の狭い溝を「コ」の字形に掘り込んで方形の区画をつくり、その中に石棺2基と甕棺1基を設置している。

南群：1号墓を中心とする。1号墓の南側には、試掘トレンチで単独の墓壙状の輪郭を確認しており、他にいくつかの単独の埋葬施設が存在する可能性がある。

以上のように、ボラ山遺跡では大きく3群の分布を認めた。量的・質的には、北群が優勢であるが、台状墓の規則性では1号墓が明確である。ボラ山遺跡の台状墓および埋葬施設には、(1).溝を掘らずにテラス状の区画により墓域を区画するもの。(2).2～3本の溝により方形に墓域を区画するもの。(3).明確な溝をとまわず墳丘を方形台状につくるもの。(4).区画をもたず単独で埋葬施設をもつもの、の4種がある。こうした特徴は、それぞれの群の中で傾向が整理できるが、北・中群の後日の報告に譲りたい。(浅田哲司)

(2) 方形台状墓の立地と分布について

立地　ボラ山1号墓は、佐治川の支流である遠阪川に接する丘陵上に立地していた。丘陵の背後には、土ノ堂と呼ばれる丘陵が高くそびえ、逆に西側部では、広く青垣町の平地部を望む場所にあたる。こうした、台状墓の立地する場所を検討してみると、巻末の集成表にあげた兵庫県・京都府の台状墓は、多くの場合が河川に接し、盆地や平野などの平坦地(生活の場)を望む丘陵上や尾根の先端部(非生活の場)に築かれていることがわかる。もちろん、大規模な河川に接しないこともあるが、前面に平野部を望む点においては共通するあり方を示している。ボラ山遺跡もこのような諸例と共通しており、河川・平野部を共有している。したがって、ボラ山1号墓はこの地域において一般的な立地条件であるといえるし、当時の集落と墓域の選定基準や、社会的制約・習慣の中で一様のあり方を示している。

分布　丹波・丹後・但馬および福井県を中心とする日本海側の地域は、近畿地方やその他の地域に比べて、多くの台状墓が築造されていることは周知の事実である。こうした台状墓の分布を、総括的に検討することはできないが、周辺地域の状況を多少整理する。

ボラ山1号墓周辺で、約40遺跡の台状墓の分布を調べると、台状墓の立地は大きく内陸部と臨海部に分けることができ、その比率は約10：1と、圧倒的に内陸部が多い。ボラ山1号墓も内陸部に立地する。

こうした台状墓の分布の重要なポイントは、河川にあると判断される。1本の河川の上流から、河口に至るまでの全流域に台状墓が点々と分布することが多い。但馬地方の円山川がその好例で、河川を媒介とした臨海部から内陸部への交通路との関係が指摘できる。こうした河川流域のやや開けたところに集落が営まれ、同時に台状墓を中心とする墓域が設定されたことがうかがえる。加古川流域においては、台状墓の確認例が少ないが、河川流域に台状墓が多く分布する傾向から、将来的に同様の台状墓が発見される可能性もある。(沖田絵麻)

(3) 方形台状墓の構造と規模について

方形台状墓の構造 丹波・丹後・但馬地方などで、方形台状墓と考えられている墳墓の構造は、一般的に溝の有無や造成方法により、次の4類に分類することができる。

- 1.尾根に直交する2条の溝で墓域を区画し、地山を方形に整形するもの。盛土をするものもあるが、確認できないものもある。
- 2.尾根に直行あるいは平行に1条の溝を掘りこみ、斜面の地山を削ってテラス状に整形するもの。そのうちには盛土をするものもある。
- 3.溝の掘削をおこなわず、削り出しによって方形台状にするもの。
- 4.溝の掘削をおこなわず、傾斜部などにテラス状の平坦部をつくるもの。

今回調査したボラ山1号墓は、上記の分類では1類に属する。こうした構造をもつものは、丹波では福知山市狸谷古墳群の18号墳、丹後では京都府中郡大宮町小池古墳群1・2・3・4・10号墳、但馬では立石墳墓群102号墓などにみられる。このタイプは、主に尾根の鞍部に存在するため、墓域を区画するための明確な溝をもつ。

溝の有無は、一つに立地によって左右されると考えられる。例えば、京都府福知山市大道古墳群では、尾根の上部から下部にかけて、尾根と直行する溝で区画する台状墓と、階段状の台状墓が各5基ずつ連続して並んでいる。ここでは、前者が比較的緩やかな斜面に築かれている。急斜面に位置する台状墓で溝が無いものは、高低差が溝による区画と、同等の役割を担っていたためと解釈することも可能であろう。

したがって、台状墓の構造の種類は、主に立地による構造の相違であることがうかがえ、選地に優劣があるかは別として、種類の差によって優劣をつけ得るものではないと考える。一方、ボラ山遺跡の中群のように、見通しのきく稜線を敬遠して斜面に築かれていることもあり、築造にあたって選地上の制約があったことも考慮しておく必要がある。

方形台状墓の規模 次に、周辺地域の方形台状墓の規模についてみてみよう。巻末の集成表から、台状墓の規模が明確なものを抽出して整理した。台状墓の規模はおおむね長辺20m以下、短辺15m以下であることがわかり、以下次のようになる。(1).5～9×5～7mのもの13基。(2).9～13×8～10mのもの30基。(3).13～16×10～13mのもの9基。(4).18～20×13～14mのもの5基、である。

規模的には、1・2の5～13mのものが一般的であり、それよりも大規模のものもみられる。丹波地方の平均規模は12.7×10.2mとなり、短辺と長辺平均の比率は1：1.3となる。また、形態は立地上の制約や残存状態によって左右されるが、長方形を呈するものが多い。したがって、ボラ山1号墓の規模は上記の2の範疇に入り、丹波地方の平均規模よりはやや小さ目であるが、周辺の地域と比較すれば平均的なものであることがいえよう。また、形態はほぼ正方形に近く、均一化した整ったものといえる。(浅田哲司)

(4) 埋葬施設について

古墳に先行して現れる墓制の方形台状墓は、埋葬施設についても古墳と多少様相を異にする。ここでは、巻末の兵庫・京都・福井・滋賀・大阪の各府県における方形台状墓の集成表を基に、埋葬形態・埋葬主体部の規模などの整理をおこない、全体的な傾向を提示して、その中で今回調査をおこなったボラ山1号墓を位置付けたい。

まずはじめに、埋葬形態についてみてみよう。台状墓は通常、複数の埋葬施設が存在するケースが多いが、埋葬施設が1基のみのものは、約32%という結果が得られた。時期的には、複数埋葬が、弥生時代中期から古墳時代にかけて幅広くみられるのに対し、単数埋葬は弥生時代末葉、あるいは古墳時代前期以降に多いのが特徴である。弥生時代の墓制から古墳への流れにともなった複数埋葬から単数埋葬への志向性が、台状墓の中でも読み取れるのである。

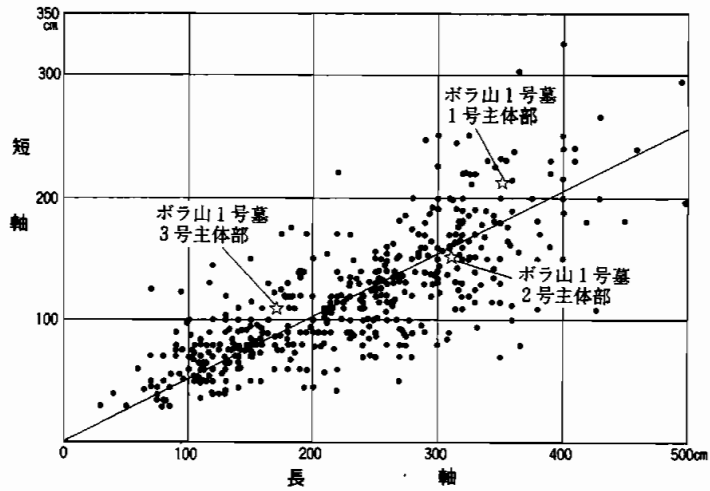
次に、台状墓に設置された埋葬施設の規模についてみてみよう。第5・6表は墓壙(掘方)、および棺について、規模の明らかなもの(推定値・現存値を含む)を抜き出して、その長軸値と短軸値を、それぞれ横軸と縦軸におとしたものである。その結果、まず墓壙は長軸が100~400cm、短軸が50~250cmの幅広い枠内にひろがり、その平均規模は、約236×121cmとなる。それぞれの墓壙は、ほぼ比例して規模の大小を違える特徴がある。この中でボラ山1号墓の墓壙は、墳丘が平均以下であるにも係わらず、大型の範疇に入り、3号主体部のみが小型に属する。このように、墓壙の規模は、中心の埋葬施設と周辺の埋葬施設によっても格差があるが、今回の表では一律に表している。

棺の規模をみると、長軸100~260cm、短軸30~70cmの枠内におさまリ、当然のことながら墓壙に比べて狭い範囲内への集中が目立っている。棺の平均規模は187×62cmである。墓壙に比べて大小の規模の比率が正比例を示さず、短軸幅がかなり限定されて1m以内に固定され、長軸のみが増減して規模の大小を表しているのが特徴である。ボラ山1号墓の場合は中間に近いが、やや大きめな点は墓壙に準じている。

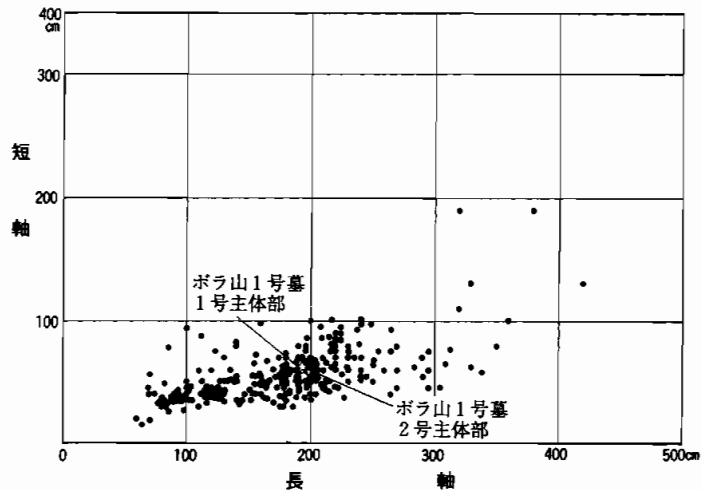
棺材についてみると、報告書などによるかぎり、全体の69%を木棺が占める。石棺の他に、石室(竪穴式石室の小規模なもの)は数基存在しているが、いずれも弥生時代末葉ないしは古墳時代に入ってからのものであり、これらの墳墓を、台状墓とするのか、古墳と判断するのかの定義も定かではない。さらに木棺の中でも、箱形木棺の報告が圧倒的に多く、ついで、組合式木棺、割竹形木棺、舟底形木棺と続いている。これらは各時期にみられることから、年代による推移の違いというよりは、地域的特色または各古墳群内の趣向によるものであろう。中には同一古墳群内でも異型の木棺を併用する例もあり、特別な意味をもって群内で使い分けされていたことも予想される。木棺の設置法は主に直葬が主体であり、棺の安定のために敷土をしているものも割に多くみられた。さらに若干ではあるが粘土や裏込め石を使用する例もある。

墓壙・棺の主軸方向は、墓域に平行または直行するものが多いが、特別に方位に固執する傾向はなく、台状墓の立地条件などに左右される場合が多い。しかし、大阪府駒ヶ谷遺跡のように同一墳墓群内で主軸方向をほぼそろえるものもあり、墓域の中で規則性をもたせるものは多く存在している。ボラ山1号墓では、1・2号主体部において規則的な配置が認められるが、3号主体部になるとかなり方向を違えており、築造直後の主体部と後の設置において多少のずれと不規則性が生じている。しかし、墓壙が重複していないのは、墓壙の選定に制約と規則性が保たれた結果と理解できよう。

第5表 方形台状墓の墓壙の規模



第6表 方形台状墓の木棺の規模



以上が集成表をもとに検討した傾向と成果である。ボラ山1号墓は3基の埋葬施設をもち、規模的には前述のように比較的大型に属し、3号主体部のみが小型になる。また、1・2号主体部ともに木棺材の一部と考えられる木片が確認されており、同痕跡から床面もほぼ水平であると判断され、箱形木棺の可能性が強い。また、出土遺物は壺・高杯などの土器片が計25点と、鉄器が両主体部から計5点出土している。これらのことから、ボラ山1号墓はこの時期を代表する標準的な方形台状墓としてとらえることが出来るが、大型の墓壙に鉄器を伴う点は非常に重要な要素であり、この地域の有力者層を葬った墓として位置づけることも可能であろう。(田島夕美子・日倉嘉代)

3. ボラ山遺跡と周辺の遺跡

ボラ山遺跡の西側に広がる平野部は、佐治川と遠阪川が形成した沖積地であり、青垣町で最もひらけた場所である。この平野部を望む周辺の山麓や現在の佐治市街地に当たる場所には、古くから人々が生活していた痕跡を認める。ここでは周辺の遺跡を概観し、ボラ山遺跡の歴史的な位置付けに迫りたい。

ボラ山遺跡の概要は、前述してきた通りであり、弥生時代末葉から古墳時代の初頭にかけて営まれた墳墓群である。ボラ山遺跡の周辺で確認されている遺跡はさほど多くない。縄文時代の遺跡では、ボラ山遺跡の南方の正面の山腹に、集落址と考えられる西ヶ谷遺跡がある。これは現在町内で知られている最も古い遺跡である。その他、氷上郡では山南町の井原、西ノ沢付近において乳棒状石斧や、同町梶において石棒などが確認されており、春日町国領遺跡、市島町梶原遺跡でも縄文時代の遺物が確認されている。

弥生時代になると遺跡数は増える。青垣町では、ボラ山遺跡の他に、ボラ山遺跡の南側の丘陵を隔てて田井縄遺跡がある。田井縄遺跡では、弥生時代後期の集落跡が最近の調査で確認された。丘陵の裾部を削平して円形の住居跡が7基前後築かれており、集落を画すると考えられる溝からも土器片などが出土した。ボラ山遺跡とは近距離にあり、重複する時期の可能性ももたれており、集落と墓域の関係が示唆されている。

郡内の弥生時代の遺跡では、山南町の大字応地、大字井原の至山山麓で弥生時代中期末の土器片が採集されており、弥生時代後期の土器片も至山山麓などから出土している。春日町七日市遺跡では大規模な集落とともに、方形周溝墓が調査されている。当該期の墓制について考察する際の好資料である。その他、春日町国領遺跡では、単独ではあるが銅剣形の磨製石剣が完形のまま出土しているし、同町野々間遺跡では銅鐸が出土している。市島町においても、長者ヶ野遺跡や梶原遺跡などの弥生時代の集落がある。ボラ山遺跡の周辺部では、七日市遺跡にみられるような大規模な集落は未確認であるが、今後、春日町でみられたような状況が確認される可能性は充分あろう。

古墳時代には、山地を流れる主な河川に沿って古墳がつくられるようになり、前期古墳は数kmから10数kmの距離をおいて点在する。氷上郡では氷上町に親王塚古墳がある。親王塚古墳は加古川と由良川との分水界のすぐ近くに位置する約40mの円墳で、大阪府、奈良県、山口県にそれぞれ同範鏡をもつ三角縁三神三獣鏡などが竪穴式石室より発見された。氷上郡において数少ない前期古墳であるが、近年にいたって未調査のまま造成された。

一方、山南町の丸山古墳は古墳時代前期後半に属する。当郡では例の少ない前方後円墳であり、調査された結果、狭小な竪穴式石室が2基検出されている。加古川の中流域に入るため、明らかに親王塚古墳とは勢力範囲を違えている。

古墳時代中期には、春日町二間塚古墳が有名である。40mほどの前方後円墳であり、七日市遺跡から比較的近くにある。その他、中期の古墳は各地に存在するが、いずれも10~20mほどの円墳が多く、規模が突出したものは見あたらない。

青垣町内の古墳は、山垣から中佐治にかけての慶相寺古墳群の他、西芦田から栗住野には坊ヶ谷古墳群が知られ、その他、田井縄天神古墳、山ノ神古墳、東芦田高座神社裏古墳群などが存在する。詳細は不明なものが多いが、横穴式石室を残すものもあり、ほとんどが古墳時代後期の可能性が高い。それぞれの古墳が、遠阪川中流域や、南地域の佐治川の右岸の流域に沿った山裾に集中してみられるのが特徴であり、弥生時代から引き続き、この地域が中心的な場所であったことがわかる。

ボラ山遺跡においても、古墳時代の円墳が4基存在していた。ボラ山遺跡の丘陵最北端の頂部(通称ブラ山)には、古墳時代中期のブラ山古墳があった。ここには、竪穴式石室と箱式石室の2つの埋葬施設がつくられており、両者とも石材は周辺地域で産出する流紋岩質の河原石を選び出して利用していた。氷上郡内では、竪穴式石室をもつ古墳の調査例としては3例目で、山南町丸山2号墳と形状が類似しており、古墳時代中期から後期にかけて、この地域を基盤とする地域首長の墓と考えて間違いない。

古代の青垣町の様子は不明な点が多い。田井縄遺跡では、奈良時代の遺物が多少知られており、集落跡と考えられる。周辺地域では、氷上町において郡衙推定地とされる市辺遺跡と氷上遺跡があり、春日町では「里」の役所である山垣遺跡がある。山垣遺跡では「コ」の字形の配列をもつ建物とともに、「春部里長」・「春日郷」と記した木簡や墨書土器が多数出土し、当時の行政組織の解明をする貴重な資料として位置付けられている。また、市島町では、氷上郡内で確認されている唯一の古代寺院である三ツ塚廃寺を中心とする三ツ塚遺跡があり、近接して当時の須恵器生産地帯である鴨庄窯跡群が存在する。

青垣町においては、今後の調査に期待するところが大きい。古代においては、現在の佐治市街地周辺、あるいは中佐治付近が山陰道の「佐治駅」の比定地になっている。記録に残る「佐治郷」もこの付近と考えることができ、周辺にこうした施設や集落および生産地などが営まれていたことは充分予想できる。

中世には、ボラ山遺跡においても鎌倉時代末の土坑がみついている。その他、当地域は芦田氏・足立氏に関連する山城・城館跡がいくつか知られており、「丹波志」記載の足立堀真利の館とされる「山垣館」が近年の調査で確認され、15世紀までさかのぼる方形館であることが判明した他、多くの遺跡を認めることができる。

以上、ボラ山遺跡の周辺の遺跡について概観してきた。弥生時代の状況については不明な点が多いが、古代の山陰道が通過し、駅の存在もうかがえる点において、南北の交通上の重要な地域であったことはいままでのまもない。しかし、時期的にボラ山遺跡の直後の前期古墳が

南部の水上町に築かれ、続く中期の主な古墳も郡の南部に偏る傾向や、古代の郡衙・寺院についても同様な傾向が認められる点からして、当地は中心部よりやや北に外れた場所として位置付けられよう。しかし、ボラ山遺跡の時代から佐治地域を勢力基盤とした小首長が存在したことは事実であり、続く古墳時代中期のボラ山古墳へと引き継がれた。古代には「佐治駅」とともに「佐治郷」が行政組織の中に組み込まれていった。(河端智・桑田聡)

4. 小 結

ボラ山1号墓が所在する青垣町は、旧国の丹波国に属するが、北・西部は但馬・播磨との国境に接している。眼下には加古川水系の佐治川が流れており、地理的には瀬戸内文化圏であるが、畿内や日本海側の影響を受けたと考えられる地域である。

ボラ山1号墓は、通称ボラ山と呼ばれる独立丘陵上のボラ山遺跡に存在する、弥生時代終末期の方形台状墓(方形低墳丘墓)である。墳丘は、溝によって南北を明確に区画される。丘陵の尾根筋上に立地しているため、溝を掘削して墓域を区画することが、同時に墳丘の整形をかねている。東西の墳端は明瞭でないが、地山の削り出しをおこなったと考えられる。溝の掘削との地山を削り出した残土で、盛土を施して墳丘を台形状に整形している。墳丘の四隅に貼石や列石は施さず、中国地方の四隅突出墓とは性格を異にする。規模は、ボラ山遺跡の該期の墳墓中では最大であるが、すぐ南側に近接した時期と考えられる小墓壙が試掘溝で確認されており、遺跡内での独立度がそれほど高いとはいえない。

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央部に2基並列しており(1・2号主体部)、その南東部に主軸方向を変えて1基存在している(3号主体部)。1・2号主体部は、墳丘のほぼ中央で並列し、切合い関係も存在していないため、埋葬時期の明確な前後関係は不明であるが、墓壙の規模や並び方に規則性があることから、近接した時期とすることができよう。墓壙の規模は前項で記した通り、周辺地域内でもやや大型に属する。1・2号主体部は、いずれも木棺の痕跡が確認でき、3号主体部は墳丘の南東部に位置し、掘方は1・2号主体部に比べてかなり小さく、主軸方向も約40°東にふれている。主軸方向や墓壙の規模などから判断すると、墳丘内でこの1基のみが性格を異にしており、埋葬の時期や内容が異なる可能性が高いが、掘方の確認のみで保存したため、言及することを避けたい。

また、今回は周溝内埋葬の存在の確認を主な目的として、わざわざ溝に縦断面を設定してその把握に努めたが、存在は確認できなかった。こうした試みは、今後重要な例になろう。墳丘上に複数の埋葬施設が存在し、周溝内埋葬をおこなわない現象は、時期的・地域的な特徴と当墓の性格を反映している可能性もあるが、ボラ山遺跡の北群では溝内に埋葬が確認されており、断定はできない。

1・2号主体部は、墓壙が尾根の稜線にほぼ平行しており、主軸の方向も絶対方位の南北

に近い。埋葬時の頭位は、墓墳内の鉄器の出土状況から判断して、北方向であったと推測される。ボラ山遺跡内の他の墳墓群の墓墳は、主軸が立地する地形に規制されており、北方向の頭位を意識していたとは考えにくい。ボラ山1号墓では、立地に規制されて北方向の頭位となったのか、逆に北頭位を意識して選地したのかは、墳墓の時期や埋葬形態との関係も考慮して、今後、検討すべき課題である。

副葬品は、1号主体部から鉄斧(図版9-15)、鉈(16)が、2号主体部からは鉄鏃(17・19)、鉈(18)が出土した。また、1号主体部の木棺痕跡の検出面において、小型壺(10)が棺痕跡の東西に分かれて出土しており、埋葬時に破碎供献されたと考えられる。1号主体部がボラ山1号墓の中心埋葬施設と考えられるが、副葬品は特別に卓越しているとはいえない。鉄器の所属時期は、出土土器とほぼ矛盾がないと考えるが、丹波地方の鉄器の地域色について論じるためには、さらなる類例の増加をまちたい。

出土土器は、前章で記した通り、やや古相を呈するものも含まれているが、時的には概ね畿内庄内式併行期のと理解できる。土器の特徴は、摩滅が激しく調整が不明なため、判断が難しいが、瀬戸内海側よりは日本海側の影響を受けていると考えられる。土器の胎土は肉眼で観察する限り、ほとんどが在地の胎土である。S字状浮文をもつ土器(14)は畿内に類例があり、搬入品の可能性がある。当地域の地域性と他地域との交流関係を考察する際の好資料といえる。出土土器の組合せについては、前項で整理したように周辺地域の他の諸例と同様なあり方を示している。

当該期は、弥生時代の墓制から古墳時代の墓制への転換期であり、墳丘や埋葬形態などに地域差が見受けられる。遺跡の北群では、丹波地方においては例をみない資料として重要な吉備地方系の特殊壺形土器が出土しており、当地域の首長墓としてふさわしい内容となる。また、時期は後出の可能性が高いが、丘陵の北部にはボラ山古墳が、南端には円墳が1基確認されている。弥生時代から古墳時代にかけて、単純に同一系列ではないにせよ、集団墓的な性格の墳墓群から、首長層の単数埋葬化の志向性にとまって墓域が独立化する様相を、同一の丘陵上で示していると理解することができるのかも知れない。

付近の弥生時代の集落址としては、田井縄遺跡があげられよう。ボラ山遺跡の集落とは断定できないが併行した時期もあり、ボラ山・ボラ山が弥生時代末期から古墳時代において、こうした居住区から明確に分離された墓域として意識されていたと考えられる。(帆足俊文)

おわりに

今回調査したボラ山1号墓は、良好に遺存する方形台状墓であった。その成果と周辺の諸例との比較は、前章で記述した通りであり、青垣町および水上郡内において、貴重な資料を

提供することができた。特に、埋葬主体部は良好に残り、出土遺物は少ないものの、攪乱などの被害を受けることなく残存し、調査・記録をすることができた。

また、検出はできなかったが、溝部においては縦方向に畦を残し、埋葬施設の確認に精力を注いだ。仮に存在した場合には、溝および溝内の複数の施設との相対的な時間関係の把握を試みた。中心主体を含めた1号墓全体の中における埋葬施設の先後関係や、被葬者層の把握から、台状墓の性格と実態を明らかにする目的を立てた。今後、こうした調査意識や方法は継続しておこなわなければならない。

方形台状墓についての明確な定義や、歴史的意義については、本稿では提示するには至っていないが、こうした墳墓が各地域において認められ、その後、古墳へと移行していく事実は、在地の勢力基盤を考える上で極めて重要であろう。

ボラ山1号墓が所在する青垣町は、原始・古代における遺跡の確認が非常に遅れている地域である。考古学研究室において、氷上郡全域の分布調査に取り組んでいるが、青垣町にはまだ至っていない。したがって、当町の歴史の復元をおこなうには制約が多いが、弥生時代末葉から古墳時代前葉にかけて営まれた有力層の墓であるボラ山遺跡は、基準的な資料としてきわめて貴重である。この時代が、巨大な古墳造営へと大きく変革していた時代であることを考えても、この地域における有力層の存在と墓のあり方は重要である。

当調査は、氷上郡教育委員会の多大な協力のもとに、夏期休暇を利用して考古学実習の野外調査の一貫として実施した。調査に至るまでは、大学において周辺地域の遺跡の状況や台状墓の諸例の収集・認識から始まって、具体的な調査方法の検討をおこなった。さらに、調査では日々の成果と経過の確認とともに、後日の計画と目標を協議し、遺物・図面などの整理を行った。調査終了後は大学において、遺物・図面などの再整理に取り掛り、実際の原稿分担におよんだ。本稿では不備も多々あるが、こうした実習生の努力に支えられ刊行が実現した。成稿までには多くの時間を費し、集成型や項目ごとの検討・考察も加えられた。その努力の結集として、また考古学実習の成果物として刊行したことを重ねて記しておきたい。

最後に、調査および本稿の成稿に至るまでには、多くの方々の指導と協力があつた。取り分け、氷上郡教育委員会には、調査の実施から今日に至るまで、多大な指導と協力をいただいた。さらには、在学生や卒業生の他、学外関係者の多くの方々や機関に指導・協力をいただいた。文末をかりて感謝の意を表します。(植野浩三)

<参考文献>

植野浩三「本調査」『考古学調査研究ハンドブックス』1 野外編 雄山閣 1984年。

奥村清一郎「寺岡遺跡」(『京都府野田川町文化財調査報告』第2集 野田川町教育委員会) 1988年。

小山雅人・土橋誠「青野西遺跡」(「京都府遺跡調査報告書」第4冊(財)京都府埋蔵文化財センター)
1985年。

瀬戸谷皓「本井墳墓群・尼城址」 豊岡市教育委員会 1988年。

種定淳介「七日市遺跡(I)」-第2分冊-(「近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書」XII-
2 兵庫県教育委員会) 1990年。

都出比呂志「墳墓」『岩波講座 日本考古学』第4巻 岩波書店 1986年。

寺沢薫・森岡秀人編「弥生土器の様式と編年」近畿編 木耳社 1989年。

常盤井智行ほか「丹波の古墳-由良川流域の古墳-」 山城考古学研究会 1983年。

豊田武ほか「流域をたどる歴史」第5巻 近畿編 きょうせい 1978年。

平安博物館「京都府中郡大宮町小池古墳群」(「大宮町文化財調査報告」第3集 大宮町教育委員会)
1984年。

兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史』第1巻 1974年。

古川茂正編「丹波志」氷上郡之部(文化元年本) 氷上文化協会 1955年。

文化庁文化財保護部『全国遺跡地図』28 兵庫県(財)国土地理協会 1978年。

正岡睦夫・松本岩雄編「弥生土器の様式と編年」山陽・山陰編 木耳社 1992年。

萬谷幸美「御園遺跡出土のS字状浮文土器について」『美園』(財)大阪文化財センター 1985年。



発掘調査参加者（前半期）



発掘調査参加者（後半期）

方形台状墓集成表

凡例

- 本集成は弥生時代～古墳時代初頭にかけての方形台状墓、もしくはそれに準ずる墳墓を集成した。
- 集成した府県は、兵庫県、京都府、福井県、滋賀県、大阪府の2府3県である。
- 集成表での年代、立地、規模、埋葬施設の内容、出土遺物の種類、および数量などは全て報告書の記載にしたがった。
- 集成表で使用した記号は以下の通りである。
(埋葬施設の位置)
A：墳丘のほぼ中央 B：Aよりずれるが、ほぼ中央付近 C：墳丘の端付近
D：墳丘外 E：溝内
(埋葬方法) …番号は棺材を示し、注記はその種類を示す。
1：木棺 2：石棺 3：土器棺 4：土壙墓
(遺物の種類)
●弥生土器 ○土師器 △須恵器
*但し、出土数のわかるものは、その数量を記した。その場合、弥生土器以外には遺物の種類を“その他”欄に()で記した。
*鉄器については、全て数量で記した。
- 参考文献は、表末に一括して掲載した。

兵 庫 展

遺跡名	所在地	年代	立地	規模(m)	外部施設名	埋葬施設			主体部内出土遺物				主体部外出土遺物				備考	文献		
						墓棟・規模(m)	内容・規模(m)	主軸	土器類		鉄器類		玉類		土器類				その他	
									土器類	鉄器類	土器類	鉄器類	土器類	鉄器類	土器類	鉄器類			土器類	鉄器類
ボラ出1号墓	兵庫県水上郡青垣町口埴久字ボラ山	任内式 併行期	丘陵尾根	11.2×10.3 ×(h) 0.3~0.7	○		3.30×2.00×0.83	1 箱形 2.09×0.77		1 1 1	1 1 1	1 1 1	3 7 2	2 瓦器細片	出土遺物数は 器種に分かる もののみ					
印路台状墓	神戸市西区	弥生中期 後半 (IV期)	尾根端	20.0×14.0 ×(h) 1.6	○		2.72×0.92×0.25	1 割竹形	N26° E	1			1			兵①				
西神戸ニュータウン 第2遺跡 1号 2号	神戸市西区	〃	丘陵	9.0			(1) (2) (3) と も	1 〃								兵①				
妙楽寺墳墓群 4 A	豊岡市妙楽寺大谷 450番地の1	弥生後期 ~古墳初期	〃	11.5×9.3以上			1.90×0.90	1 箱形 1.30×0.50	N75° W		1		9 2 6 10	蓋 1 砥石 1		兵② ③ ④ 京④				
4 B	〃	〃	〃	15.3×10.0以上			3.30×2.20	1 〃 2.30×0.60	N62° W		1									
4 C	〃	〃	〃	〃			1.65×1.30	1 〃 1.25×0.45	N61° W		1 1									
	〃	〃	〃	〃			2.95×1.65	1 〃 2.10×0.60	N71° W		1									
	〃	〃	〃	〃			2.90×1.80	1 〃 2.04×0.60	N70° W											
	〃	〃	〃	〃			1.94×1.40	1 〃 1.35×0.52	N28° E											
	〃	〃	〃	〃			1.38×0.77	1 箱形か?	N72° W											
	〃	〃	〃	〃			1.58×0.85	1 〃	N69° W		2 1	1 1								
	〃	〃	〃	〃			1.82×1.20	1 箱形 1.12×0.50	N65° W		1									
	〃	〃	〃	〃			1.84×1.20	1 〃 0.92×0.34	N16° E		1	2								
4 D	〃	〃	〃	6.5×10.0以上			3.40×1.50	1 〃 2.40×0.60	N69° W											
	〃	〃	〃	〃			1.50×0.75	1 〃 1.20×0.40	N77° W											
5 A	〃	〃	〃	12.0×7.0 ×(h) 0.5			3.00×1.45	1 〃 2.00×0.50	N69° W											
	〃	〃	〃	〃			3.20×1.80	1 〃 2.50×0.50	N70° E											
	〃	〃	〃	〃			4.00×2.40	1 〃	N68° E											
5 B	〃	〃	〃	8.75×5.0以上			3.02×1.45	1 箱形 1.90×0.43	N36° W											
5 C	〃	〃	〃	5.0以上×5.0以上			1.60×0.93	1 〃 1.15×0.44	N55° E											
	〃	〃	〃	〃			2.00×1.20	1 〃 1.33×0.51	N49° W											
	〃	〃	〃	〃			1.40×0.77	1 〃 1.00×0.36	N41° W											
	〃	〃	〃	〃			1.40×0.77	1 〃 1.62×0.37	N67° W											
	〃	〃	〃	〃			2.16×1.10	1 〃 1.75×0.56	N33° E											
8 A	〃	〃	〃	〃			2.47×1.25	1 〃	N36° E											

兵器庫

遺跡名	所在地	年代	立地	規模(m)	外部 名	埋葬施設			主体部内出土遺物				主体部外出土遺物				備考	文献
						墓室・規模(m)	内容・規模(m)	主軸	土器類	鉄器類	玉器	その他	土器類	土器類	その他	土器類		
					高さ	位置												
					2	2.00×0.46	1	〃	1.70×0.33									
					3	3.10×1.70	1	〃	2.70×0.45	1	1							
					4	2.30×0.90	2											
					5	0.90×0.70		土溝墓?										
101	〃	〃	〃		1	2.55×1.27		1.90×0.94										
					2	2.05×0.90		1.90×0.60										
					3	2.28×0.90		1.78×0.45										
					4	2.15×1.06												
					5	2.90×1.40		2.06×0.60										
100	〃	〃	〃		1	2.85×1.55		1.80×0.55										
					2	1.13×0.59		0.83×0.30										
					3	1.80×0.85		1.25×0.40										
					4	0.85×0.45												
					5	2.45×0.95		1.65×0.48										
					6	1.52×0.70		0.94×0.35										
					7	2.50×0.64		2.05×0.40										
99	〃	〃	〃		1	3.80×1.50		2.50×0.64										
					2	2.40×1.10		1.83×0.42										
					3	1.72×0.75		1.23×0.37										
98	〃	〃	〃		1	1.65×1.00		1.00×0.50										
					2	1.75×1.25		1.35×0.60										
					3	2.10×0.90		1.47×0.40										
					4	2.25×1.15		1.65×0.67										
					5	0.82×0.34		0.64×0.15										
					6	1.16×0.74		0.80×0.35										
					7	2.25×1.10		1.80×0.70										
97	〃	〃	〃		1	2.40×1.00		1.90×0.45										
北浦	〃	〃	丘陵	4.0~5.0×1.0	南	2.20×1.20		組合式?		E-W	1							兵④
19号	〃	弥生後期			北	2.70×1.53		〃		E-W								兵⑤
上体山・東山	〃	弥生後期	尾根突起		1	1.17×0.90	1	組合式	0.82×0.49	NW-SE								兵⑥
墳墓群	〃	弥生後期			2	4.02×1.87	1	〃	2.84×0.62	NNE-SSW	1	1	1	1				兵⑦

兵 庫 県

通 跡 名	所 在 地	年 代	立 地	規 模 (m)	外 部 施 設 名	埋 葬 施 設		主 体 部 内 出 土 遺 物		主 体 部 外 出 土 遺 物				備 考	文 献							
						墓 塚・規 模 (m)	内 容・規 模 (m)	主 軸	土 器 類	鉄 器 類	玉 類	土 器 類	土 器 類			土 器 類	土 器 類	土 器 類	土 器 類	土 器 類	土 器 類	
14	〃	〃	〃	〃	1	1.40×0.80	不 明															
						2.50×1.50	1 H型組合式 1.73×0.45	1	雑形鉄器	1												
						2.45×0.85	1 〃 1.45×0.35	1	〃	1												
						2.75×1.85	1 〃 2.15×0.50	1	〃	1												
						2.65以上×1.15	1 組合式 1.55以上×0.40以上	1														
15	〃	〃	〃	〃	1	2.85×1.70	木郭 1.80×0.40	1	雑形鉄器	1												
					2	2.20×1.15	1 H型組合式 1.55×0.55	1	1													
16	〃	〃	〃	〃		2.25以上×1.15 (二段)	1 組合式 1.40以上×0.55	1	雑形鉄器	1												
					1	3.55×2.30	2 2.00×0.35	2		1												
17	〃	〃	〃	〃	2	3.90×1.60	1 H型組合式 2.65×0.40	1	1	1												
18	〃	〃	〃	〃	1	2.85×1.70	木郭 1.75×0.30	1	雑形鉄器	1												
					第1	2.82×1.40	1 組合式 2.19×0.46	1	雑形鉄器	1												
岩井本井 墳墓群 1号墓	〃	弥生後期 後半 ～古墳初期	尾根先端	約9.5	第2	2.09×1.10	1 〃 1.55×0.48	1														
					第3	2.38×1.17	1 〃 1.77×0.52	1														
					第4	2.50×1.57 (二段)	1 〃 1.97×0.80	1														
					第1 A	2.29×1.29 (狭い二段)	1 〃 1.60×0.53 N79° W	1	雑形鉄器	1												
4号墓	〃	〃	尾根	約7.0×1.5	第2 B	1.26以上×0.80以上	不明 (土壌層の可能性あり) N6° ?															
					第1	1.43×0.92	1 組合式 0.88×0.34	1														
磯田若宮 4号地点	〃	弥生後期 後半	尾根	8.6×5.5	第2	1.47×0.92	1 〃 1.13×0.50	1														
					第3	1.55×0.82	1 〃 0.96×0.36	1														
					第4	2.34×0.88	1 〃 1.91×0.42	1														
					第5	1.29×0.70	1 〃 0.88×0.38	1														
					第6	1.33×0.93	1															
					第7 A	2.67×1.00	1 H型組合式 1.88×0.38	1	雑形鉄器	1												
					第8	1.77×1.20	1 組合式 1.31×0.43	1	〃	1												
					第9	1.10×0.71	1 〃	1														
					第10	1.53×0.82	1 〃 1.04×0.46	1	雑形鉄器	1												

兵庫県・京都府

遺跡名	所在地	年代	立地	規模(m)	外部の施設名	埋葬施設		土器類		主体部内出土遺物		備考	文献	
						内容・規模(m)	主軸	土器類	土器類	土器類	土器類			
柿坪中山 古墳群 1A号	朝来郡山崎町柿坪中山	古墳前期 前半 ~前期後半	尾根平尾部	6.0×5.5	○	1 1.85×1.10	竪穴式石室						兵⑧ 兵⑨	
				2 2.14×1.15×0.70	1									
				3 南周溝に壟棺	3									
2号墳	〃	〃	〃	17.0×12.0	○	1 3.15×2.45×0.95	竪穴式石室						兵⑧ 兵⑨	
				2 3.26×2.20×0.80	2									
				4 9.5×2.95×1.37	4									
3号墳	〃	〃	〃	23.0×15.0	○	1 3.65×2.02~3.03 ×1.23	木棺か?						兵⑧ 兵⑨	
				2 1.02×0.88×0.30	2									
				3 1.55×0.68~0.80 ×0.40	4									
秋葉山 墳墓群 7号墳	朝来郡和田山町	古墳前期 中頃 ~前期後半	尾根稜線	10.5N	○	1 2.00×1.00前後	石蓋あり						兵⑧ 兵⑨	
				2 1.02×0.88×0.30	2									
				3 1.55×0.68~0.80 ×0.40	4									
筒江中山 墳墓群	〃 和山町筒江 字中山	弥生後期 初頃 ~前半期	尾根先端		○	1 2基ともに							兵⑩	
				2 2.00×1.00前後	2									
				3 壟棺(底部穿孔) 脚部を打ち欠いた高杯を 蓋に転用	3									
阿谷古墳群 1号墳	城崎郡竹野町阿谷 字ツン谷525の1	古墳前期前半 ~前期後半	丘陵尾根	10.0×7.5	○	1 2.80×2.00×0.35	組合式木棺直葬か? 態:4柱(1は可動蓋あり)						兵⑪ 兵⑫	
				2 9.0×5.0	2									
				3 10.0×6.5	3									
3号墳	〃	〃	〃	10.0×6.5	○	1 2.90×0.91×0.34	組合式木棺直葬か?						兵⑪ 兵⑫	
				2 2.44×1.02×0.41	2									
				3 2.35×1.35×0.65	3									
4号墳	〃	〃	〃	13.0×7.0	○	1 2.20×1.45×0.15	不明(少々くどい蓋は母柱)						兵⑪ 兵⑫	
				2 16.0×9.0	2									
				3 1.05×0.55	3									
出待地遺跡 1A区	竹野町須谷 字出待地	弥生	尾根	16.0×9.0	○	1A-1 1.65×0.99	1.02×0.42					兵⑬		
2 5.12×3.50(2段) 4.05×2.00	2													
3 1.05×0.55	3													

京 都 府

遺跡名	所在地	年代	立地	規模(m)	埋 葬 施 設		主 体 部 内 出 土 遺 物				主体部外出土遺物			備 考	文 献	
					施設名	墓構・規模(m)	内容・規模(m)	主 軸	土器類	鉄器類	玉 類	土器類	高 麗 土 器 類			高 麗 土 器 類
18号墳	〃			9.3×8.2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
藤田古墳群 2号墳	〃		丘陵尾根	11.0×10.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
9号墳	〃		〃	10.0×9.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10号墳	〃		〃	9.0×8.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
宝藏山 1号	〃	弥生後期	独立丘陵		第2	0.85×0.30	1	箱形	1							京①
2号	〃	前半	〃		第3	0.70以上×0.70	1		1							京③
3号	〃	〃	〃		第1	1.80×0.60	2	箱形(箱底砂利置)	2							京④
久田山南 3号	京都府聖町久田	弥生後期 ~古墳初期	丘陵	12.0 × (h) 0.5	第2	1.80×0.90	1		1							京②
4号	〃	〃	〃	不明	第1	2.80×0.70	1	組合式	1	鉄 3	鉄 2	碧玉 2				京③
5号	〃	〃	〃	14.0×? × (h) 0.75	第2	1.60×1.10	1	箱形								京④
6号	〃	〃	〃	14.0×? × (h) 0.50	第3	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
王崎古墳群 1号墓	与謝郡野田川町 字石山小字打野	弥生後期	尾根先端	3.0×4.0 (残存)	第4	2.50以上×1.40	1	箱形	1							京⑤
2号墓	〃	〃	〃	4.0×7.0	第1	2.70以上×0.70	1	組合式	1							京③
3号墓	〃	〃	〃	9.0×10.0	第2	2.80×0.90	1	〃	1							京④
					第1	2.60×0.80	1	箱竹形	1							京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式	1							京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4	2.50×0.70	1	箱形								京④
					第1	1.60×1.10	1	箱形								京⑤
					第2	2.40以上×0.70	1	組合式								京②
					第3	1.80×0.60	1	箱形								京③
					第4											

西谷墳墓群	与瀬郡野田川町 宇石屋小字西谷	弥生終末 ~古墳初頭	丘陵	6.0 7.0	第1主体	3.12×1.98×0.88	1.20×0.65	鉄製品 出土	20m以内 偏平な石	112.1 調査台?	京⑧
2号墓					第1 A 土壇2 土壇3	1.20×2.50×0.60	1.112×0.88		赤色土	111	
3号墓			約6.0 (現状)		第2 第3	2.90×1.60×0.70 1.30×1.00×0.60	0.80×0.58 U字形の本指痕跡 1.00×0.45×0.15				
4号墓			約4.5 (現状)		第1 第3	3.00×1.90×0.70 1.15×0.80×0.30	2.20×0.85×0.88				
小池古墳群 1号墳	中郡大宮町大字 善王寺赤坂	5 C 後葉 前後	尾根東端	8.5×? (削平)	B 第3	(1段目) 2.80×0.90×0.23 (2段目) 1.95×0.90×0.25	S-N	● ○ ○	● ○	● ○ ○	京⑨
2号墳		5 C 中葉	尾根腰部	10.0×6.7	B	3.50×1.80×0.60	2.40×0.55			○ ○	
3号墳		5 C 前葉 ~中葉		11.5×10.0	I II	3.50×1.15×0.80 2.15×1.20×0.60	2.40×0.70 2.20×0.65			○ ○	二段土壇 (II)は二段土壇
4号墳		5 C 中葉	尾根西端	11.0×8.3	I II	3.25×1.20 少々くと6.150×0.50	2.90×0.70			○	
10号墳		5 C 後葉	尾根腰部	6.5×5.5	A	3.30×1.16×0.60	2.60×0.60			○ ○	1~3号墳に 類似
12号墳		13号墳と 同時期か								○	
13号墳		弥生中期	尾根裾	3.7×6.5	第1 第2 第4	2.68×0.80~1.00×0.45 1.56×0.68~0.72×0.15~0.21 1.56×0.96	梯形組合式 EN-WS			●	13号墳と同様式・ 同材料・同構造と 考えられる 同一群内の他 の古墳とは諸 相を異にする
大谷遺跡	中郡大宮町大字谷内 小字大谷	弥生中期 後葉 弥生中期末 ~後期初頭	尾根裾	13.0×6.0 × (h) 1.0~2.0	第5 A	3.60×2.15×1.00	3.30×1.30×0.25				大谷古墳の下 層に属す

京都府

遺跡名	所在地	年代	立地	規模(m)	外観	埋葬施設		主体部内出土遺物				主体部外出土遺物			備考	文献						
						内容・規模(m)	主軸	土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他									
三坂神社 墳墓群	中郡大宮町字三坂 小字有明ほか	弥生中期 後葉	尾根	約14.0×14.0	第6 C 1.90×1.35×0.45	S30° E	土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										
							土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										
		土器類					鉄器類	玉類	その他	土器類	その他											
		土器類					鉄器類	玉類	その他	土器類	その他											
		土器類					鉄器類	玉類	その他	土器類	その他											
		土器類					鉄器類	玉類	その他	土器類	その他											
		土器類					鉄器類	玉類	その他	土器類	その他											
		土器類					鉄器類	玉類	その他	土器類	その他											
		土器類					鉄器類	玉類	その他	土器類	その他											
		土器類					鉄器類	玉類	その他	土器類	その他											
4号墓	〃	〃	〃	約7.0×15.0	第11 0.40×0.40		土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										
							土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										
5号墓	〃	〃	〃	約6.0×12.0	第1 3.90×2.30		土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										
							土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										
6号墓	〃	〃	〃	約4.0×6.0	第1 2.50×1.20		土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										
							土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										
7号墓	〃	〃	〃	約7.0×12.0	第1 4.10×2.30		土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										
							土器類	鉄器類	玉類	その他	土器類	その他										

京都府・福井県

遺跡名	所在地	年代	立地	規模(m)	外観	埋葬施設		主体部内出土遺物				備考	文献										
						墓室・規模(m)	内容・規模(m)	主軸	土器類	鉄器類	玉類			その他	土器類	その他							
南群					その他	9	C 上2.8×1.5×0.6 F2.8×0.5	1	◇	N-S						・木口部に段をもたない							
						10	C 上4.5×1.8×1.0 F3.7×1.0	1	組合式	NE-SW													
						11	C 上4×0.8×0.5	4		E-W													
						12	C 上3×0.9×0.4	3	壺棺 高さ24.0#43.6														
						13	C 上4×1.0×1.8	4		NW-SE													
						14	C 上3.0×1.4×0.6 F2.3×0.7~0.8	1	箱形	E-W													
						15	B 上1.1×0.6×0.4	4	壺棺?														
						16	C 上0.9×0.8×0.7	4		S-N													
						17	C 上5×1.0×0.8		木棺?	S-N													
						1	A 上2.7×1.8×0.5	1	箱形 2.1×0.7	E-W													
						2	A 上3.3×1.9×0.6 F2.5×1.0	1	箱形 中0.4	E-W													
						3	C 上1.9×1.2×0.6 F1.5×0.7	1		E-W													
						4	C 上2.4×1.0×0.3 F 規20.5	1	箱形 下段と同強横	E-W													
						5	C 上2.4×0.9×0.2	1	◇ 1.8×0.4	S-N													
						6	C 上1.2×0.4×0.2	1		S-N													
						綾ヶ谷遺跡	福井県敦賀郡三町 南谷1字立番1	縄文中期 ~平安以前	台地の縁	18.0 × (h) 2.50	石												
						太田山墳墓群 1号墓	福井市帆谷町 北山新保町	弥生中期 中葉	丘陵尾根	18.7×17.0 × (h) 3.0	○	A	2.33×1.49×0.30	1	箱形 1.60×0.55×0.3~0.4		N38°W						
2号墓	◇	弥生中期	◇	23.0×17.0 × (h) 3.0	○	B	3.00×2.50×0.70	1	◇ 1.80×0.50×0.20	N72°W													
朝大谷古墳群 1号墳	◇ 朝大谷・江上町	弥生終末 ~古墳前半	支尾根	14.0×12.7 × (h) 0.70~1.65			表土直下斜面で検出されず																
三尾野古墳群 1号墓	◇ 三尾野町	弥生末期	尾根	8.0	○	C																	

福井県

遺跡名	所在地	年代	立地	規模(m)	外周	埋葬施設			主体部内出土遺物				備考	文献	
						位置	墓域・規模(m)	内容・規模(m)	主軸	土器類	鉄器類	玉類			その他
2号墳	〃	5C半ばを 下らない	尾根	10.0×7.0 ×(h)1.00~1.20	〇	B 3.00×1.60×0.45	1	〃	N51° E	〇銅片 1	鉄 先を束	小銅片 玉五五五	〇片2 筒1 銅鏡1	〃	
3号墳	〃	〃	〃	5.8×5.1	〇	B 2.78×0.64~1.00×0.35	1	〃	N62° E					〃	
4号墳	〃	5C前半	〃	8.4×6.4~7.0 ×(h)0.84~0.92	〇	A ? ×1.30×0.40	1	〃	N27° W				1	〃	・墳丘の6分堀山
5号墳	〃	1~4号墳 よりも後世	〃	8.8×6.0~7.5 ×(h)1.08~1.20	〇	B 3.66×0.80×0.22	1	側竹形(床はU字形)	N72° E	1	鉄 共を西		1	〃	・墳丘の6分堀山
岩内山遺跡 A区 1号墳 A区北半部	武生市岩内・杉崎町		丘陵尾根 (49)	6.1×4.3 ×(h)0.70		1号土器 2号			E-W E-W				2	① 器台 銅鏡1	・古墳とする 見解が強い
9号墳	〃	弥生後期		10.6×9.3		土器3基	1			2			8		重複
12号墳	〃	弥生末~ 古墳初		9.6×6.6			1								
長泉寺山古墳群 西山支群 1号墳	鯖江市長泉寺町36字 ソウリ14~19-1	弥生後期 ~終末	尾根先端	13.9×13.4 ×(h)2.10~3.60	〇	A 4.30×2.00	1	舟形 3.50×0.80	N41° E	1	銅部	14	5	5	・西山古墳群と 併せられる場合も ある ・銅器蓋では全 て古墳とする
3号墳	〃	古墳前期	尾根	10.2×11.4 ×(h)2.00~2.60	〇	2.60×1.40~1.54×0.30		〃 2.30×0.80			銅E4	6	3	1	・南西角陸橋 部より盛付
4号墳	〃	弥生後期	〃	12.4×11.0 ×(h)2.00~3.20	〇	3.00×1.50×0.45				1	鉄		2	1	
天神山古墳群 三ツ壳支群 8号墓	〃 入町	〃	丘陵尾根	8.0	〇	2.75×0.80×0.1~0.4 (変形二段式土器)			SE-NW	1	銅		1	〇	福⑩

〈参考文献〉

兵庫県

- ①篠宮正ほか「大谷古墳群・印路古墳群C・印路台状墓」(『兵庫県文化財調査報告』第106冊 兵庫県教育委員会) 1992年。
- ②櫃本誠一ほか「但馬 妙楽寺遺跡群」(『豊岡市立郷土館調査報告書』第5集 豊岡市教育委員会) 1975年。
- ③瀬戸谷皓「北浦古墳群・立石墳墓群」(『豊岡中核工業団地予定地内埋蔵文化財発掘調査報告』3 豊岡市教育委員会) 1975年。
- ④瀬戸谷皓「北浦古墳群」(『豊岡中核工業団地予定地内埋蔵文化財発掘調査報告』2 豊岡市教育委員会) 1975年。
- ⑤瀬戸谷皓「本井墳墓群・尼城址」(『豊岡市文化財調査報告書』18 豊岡市教育委員会) 1980年。
- ⑥豊岡市教育委員会「土屋ヶ鼻遺跡 現地説明会資料」 1992年。
- ⑦出石町教育委員会「入佐山墳墓群 現地説明会資料」 1987年。
- ⑧櫃本誠一ほか「柿坪中山墳墓群」 山東町教育委員会 1975年。
- ⑨藤井祐介「秋葉山墳墓群」 和田山町教育委員会 1978年。
- ⑩藤井保雄・田畑基「和田山町の歴史」13 和田山町史編纂室 1994年。
- ⑪櫃本誠一「但馬 阿金谷古墳群の調査」(『竹野町文化財調査報告』第2集 竹野町教育委員会) 1977年。
- ⑫村川行弘「出持地遺跡 第1次調査現地説明会資料」 竹野町教育委員会・出持地遺跡調査団 1988年。
- ⑬岡本一士ほか「兵庫県」(『埋蔵文化財研究集会資料第24冊 定型化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会) 1988年。
- ⑭瀬戸谷皓「考古資料編」(『豊岡市史』資料編 下巻抜粋 豊岡市教育委員会・豊岡市立郷土資料館) 1993年。
- ⑮瀬戸谷皓「上鉢山・東山墳墓群」(『豊岡市文化財調査報告書』第26集 豊岡市教育委員会) 1992年。
- ⑯山東町教育委員会「五反田・馬場遺跡群 現地説明会資料」 1988年。

京都府

- ①増田孝彦「豊富谷丘陵遺跡発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財情報』第4号 京都府埋蔵文化財センター 1982年。
- ②京都府教育庁指導部文化財保護課「京都府遺跡地図(第2版)」第2分冊 京都府教育委員会 1987年。
- ③常盤井智行ほか「丹波の古墳Ⅰ～由良川の古墳～」 山城考古学研究会 1983年。
- ④常盤井智行・黒田恭正「丹後大山墳墓群」(『京都府丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会) 1983年。
- ⑤下川賢司「玉峠古墳群 発掘調査現地説明会資料」 野田川町教育委員会 1991年。
- ⑥下川賢司「大石西B古墳群 発掘調査現地説明会資料」 野田川町教育委員会 1990年。
- ⑦下川賢司「荒神山古墳群 発掘調査現地説明会資料」 野田川町教育委員会 1990年。
- ⑧尾関紀雄「西谷墳墓群 発掘調査現地説明会資料」 野田川町教育委員会 1988年。
- ⑨鈴木忠司・植山茂「小池古墳群」(『大宮町文化財調査報告』第3集 大宮町教育委員会) 1984年。
- ⑩奥村清一郎ほか「大谷古墳」(『大宮町文化財調査報告』第4集 大宮町教育委員会) 1987年。
- ⑪今田昇一「有明古墳群・三坂神社墳墓群・三坂神社古墳群 現地説明会資料」 大宮町教育委員会 1992年。
- ⑫岡田晃治「帯城古墳群発掘調査 現地説明会資料」 京都府教育委員会 1984年。
- ⑬安藤信策・岡田晃治「丹後地域分布調査」(『埋蔵文化財調査概報 1987年』 京都府教育委員会) 1987年。
- ⑭佐藤晃一「入谷西A-1号墳発掘調査概要」 加悦町教育委員会 1983年。

福井県

- ①山口充「姥ヶ谷遺跡発掘調査概要」 三国町教育委員会 1981年。
- ②青木豊昭・久保智康「第3回 特別展 遺跡は語る ここ20年の成果から」 福井県立博物館 1985年。
- ③坂靖志「剣大谷1号墳発掘調査報告書」 福井市教育委員会 1993年。
- ④春日真実ほか「日本考古学協会 1993年度新潟大会シンポジウム2 東日本における古墳出現期過程の再検討」 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993年。
- ⑤中司照世「山ヶ鼻古墳群」(『大野市文化財調査報告書』第1冊 大野市教育委員会) 1980年。
- ⑥佐々木伸治「山ヶ鼻古墳群Ⅱ」(『大野市文化財調査報告書』第5冊 大野市教育委員会) 1993年。
- ⑦岩尾博之「戸板山古墳群」(『今立町埋蔵文化財調査報告』第2集 今立町教育委員会) 1986年。

- ⑧本村豪章「岩内山遺跡」(『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第9集 福井県教育委員会) 1975年。
 ⑨魚谷鎮弘「西山古墳群」(『鯖江市埋蔵文化財調査報告』 鯖江市教育委員会) 1987年。
 ⑩斉藤優ほか「天神山古墳群」 鯖江市教育委員会 1973年。
 ⑪山本昭治「鯖江市 西大井古墳群」 鯖江市教育委員会 1973年。
 ⑫清水町教育委員会「小羽山遺跡群調査概要」 1992・93・94年。
 ⑬松岡町教育委員会「乃木山古墳発掘調査報告 現地説明会資料」 1991年。
 ⑭斉藤優・青木豊昭「太田山古墳群と糞置庄」 福井県郷土史懇談会 1976年。
 ⑮福井県教育委員会「原目山遺跡37号丘 発掘調査報告書」 1971年。

滋賀県

- ①田中勝弘・兼康保明「北陸自動車道関係遺跡発掘調査報告書」VI 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1981年。
 ②谷口義介「湖北の遺跡」25・41(『中日新聞』 中日新聞社) 1982年。
 ③谷口義介・宮成良佐「北近江の遺跡」(近江文化叢書)23 サンプライト出版 1986年。
 ④余呉町誌編纂委員会編「余呉町誌」通史編 上巻 1991年。
 ⑤丸山竜平「前期古墳のいろいろ」(水野正好編「古代を考える 近江」 吉川弘文館) 1992年。
 ⑥石原道洋「木ノ本町黒田東山遺跡」『北陸自動車道関係遺跡発掘調査報告書』V 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1980年。
 ⑦谷口義介「湖北の遺跡」22(『中日新聞』 中日新聞社) 1982年。
 ⑧別所健二ほか「丁野遺跡」『北陸自動車道関係遺跡発掘調査報告書』II 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1976年。
 ⑨横田洋三「今津町福岡妙見山遺跡」『滋賀文化財だより』107 (財)滋賀県文化財保護協会 1986年。
 ⑩葛原秀雄「今津町内遺跡分布調査報告書」 今津町教育委員会 1990年。
 ⑪文化庁文化財保護課「滋賀県文化財調査年報 1985・1988・1990年版」 滋賀県教育委員会 1985・88・90年。
 ⑫横田洋三「古代人の生活と水」(渡辺誠編「湖の国の歴史を読む」 新人物往来社) 1992年。

大阪府

- ①笠井敏光・高野学「平成3年度 羽曳野市駒ヶ谷遺跡 埋蔵文化財調査概要」 1990年。

※集成表であげた以外に、脱稿後以下の墳墓を追加確認した。

兵庫県

御屋敷遺跡

- (出石郡出石町宮内)…兵庫⑬
 カヤガ谷古墳群(出石郡出石町)
 田多地引谷墳墓群(出石郡出石町多地)
 五反田墳墓群
 (朝来郡山東町柿坪)…兵庫⑯
 ・木棺墓5基(約1.3×0.7m)
 ・土器棺4基(約0.8m)
 山崎山遺跡(城崎郡竹野町)
 小山墳墓群(城崎郡日高町)
 ・方形台状墓(方墳?)1基
 天王山4号墳(神戸市西区伊川谷町別府)

京都府

- 大道古墳群…京都③
 ・方形台状墓10基
 清水古墳群…京都⑭
 ・方形台状墓62基
 大谷古墳群…京都⑮
 ・方形台状墓37基
 入谷西古墳群(与謝郡加悦町字明石小字大谷)…京都⑯
 ・方形台状墓37基
 内和田古墳群(与謝郡加悦町内和田)…京都⑰
 ・方形台状墓4グループ9基
 白米山北古墳(与謝郡加悦町)
 西小田古墳群下層(竹野郡丹後町西小田)
 太田4号墳下層(竹野郡弥栄町和田野)
 水無月山遺跡(舞鶴市)
 千原遺跡(岩滝町)
 岡城山遺跡(網野町)

福井県

- 井江葎墳墓群(芦原町)…福井④
 長泉寺山墳墓群…福井④
 茶山墳墓群(松岡町)…福井④
 御城山古墳群…福井⑤
 ・方形台状墓(方墳?)37基
 犬山古墳群…福井⑤
 ・方形台状墓(方墳?)12基
 丁古墳群…福井⑤
 ・方形台状墓(方墳?)12基
 花山古墳群…福井⑤
 ・方形台状墓(方墳?)6基
 稻荷山古墳群…福井⑤
 ・方形台状墓(方墳?)1基
 目録古墳群…福井⑤
 ・方形台状墓(方墳?)7基
 御茶ヶ端古墳群…福井⑤
 ・方形台状墓(方墳?)3基



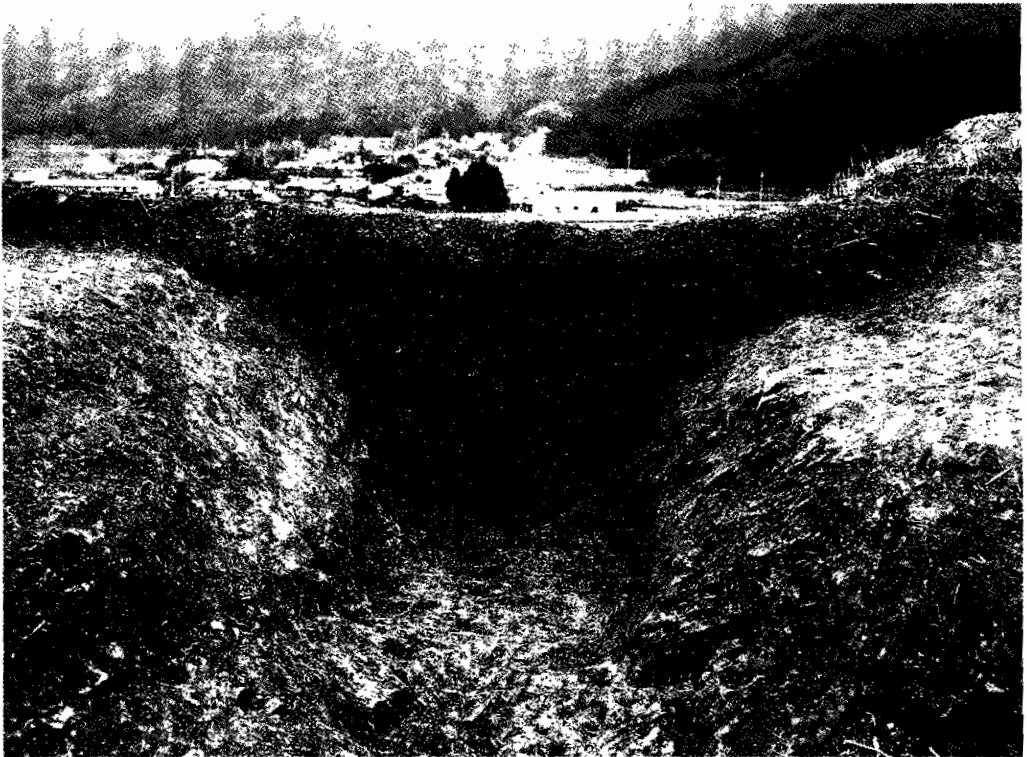
1 ボラ山1号墓遠景（西から）



2 ボラ山1号墓完掘状況（南から）



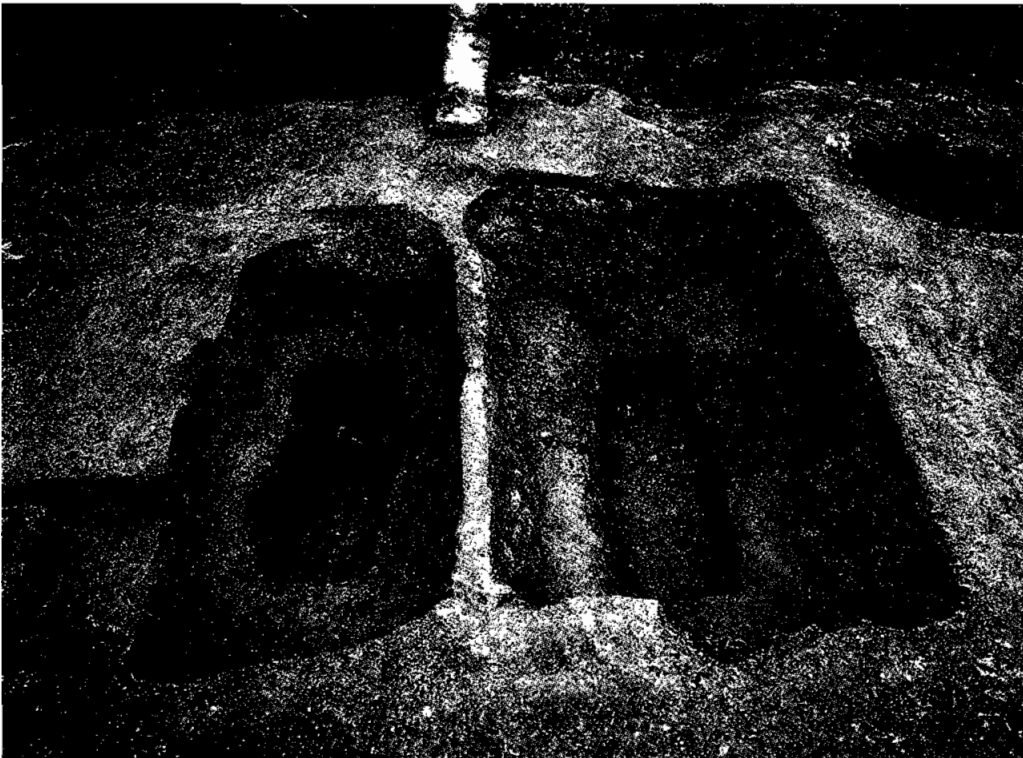
1 北側溝横断面（東から）



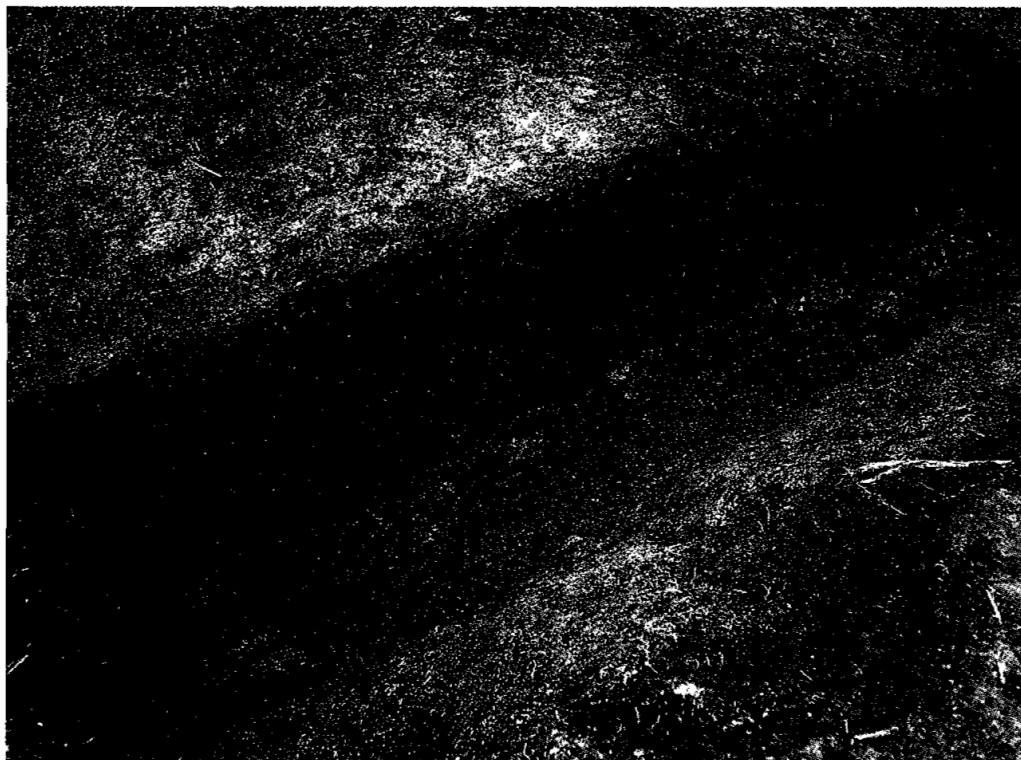
2 南側溝横断面（東から）



1 1・2号主体部の土層断面（南から）



2 1・2号主体部完掘状況（南から）



1 北側溝西側縦断面（北から）

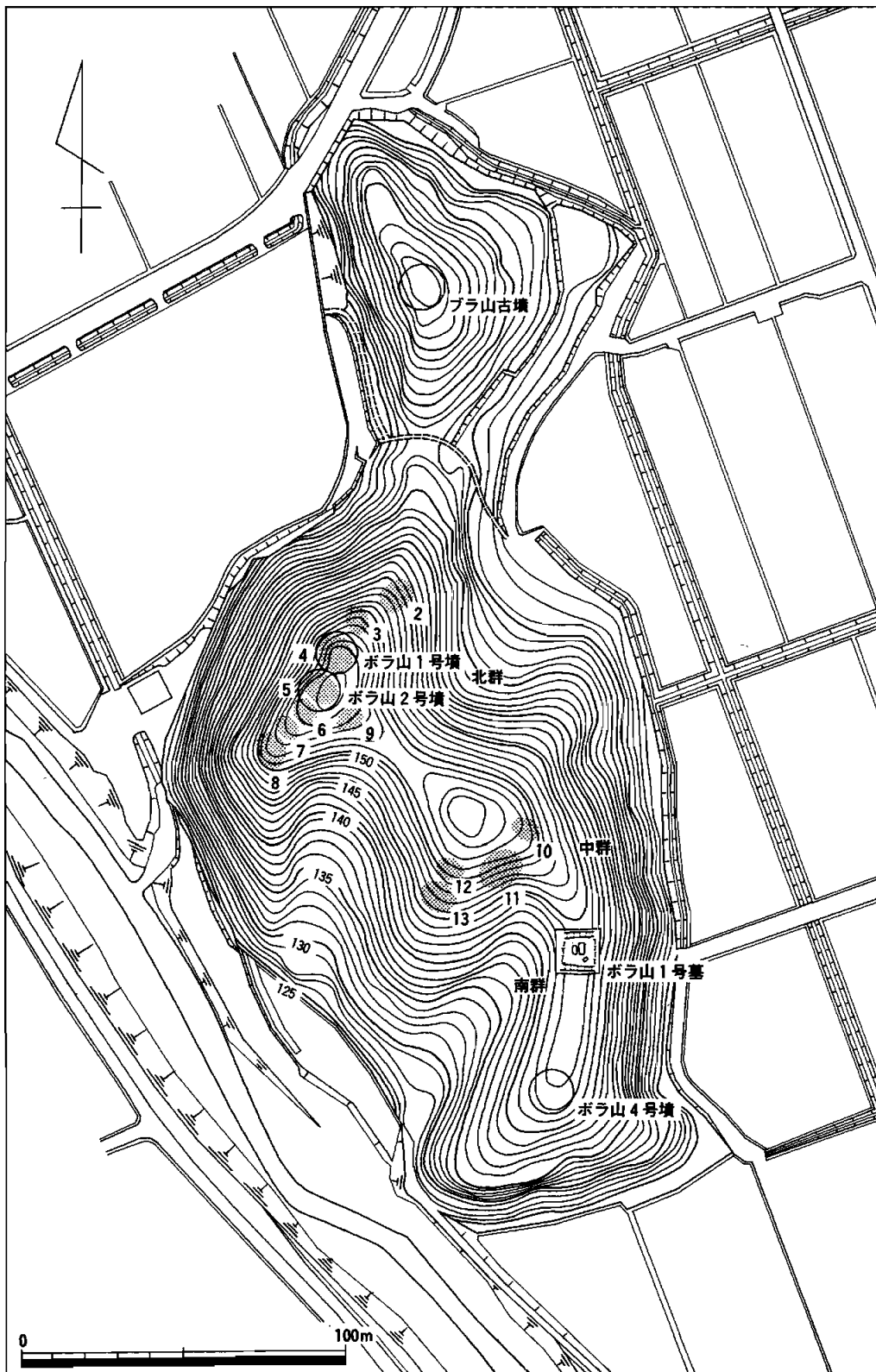


2 1号主体部鉄器出土状況（南から）



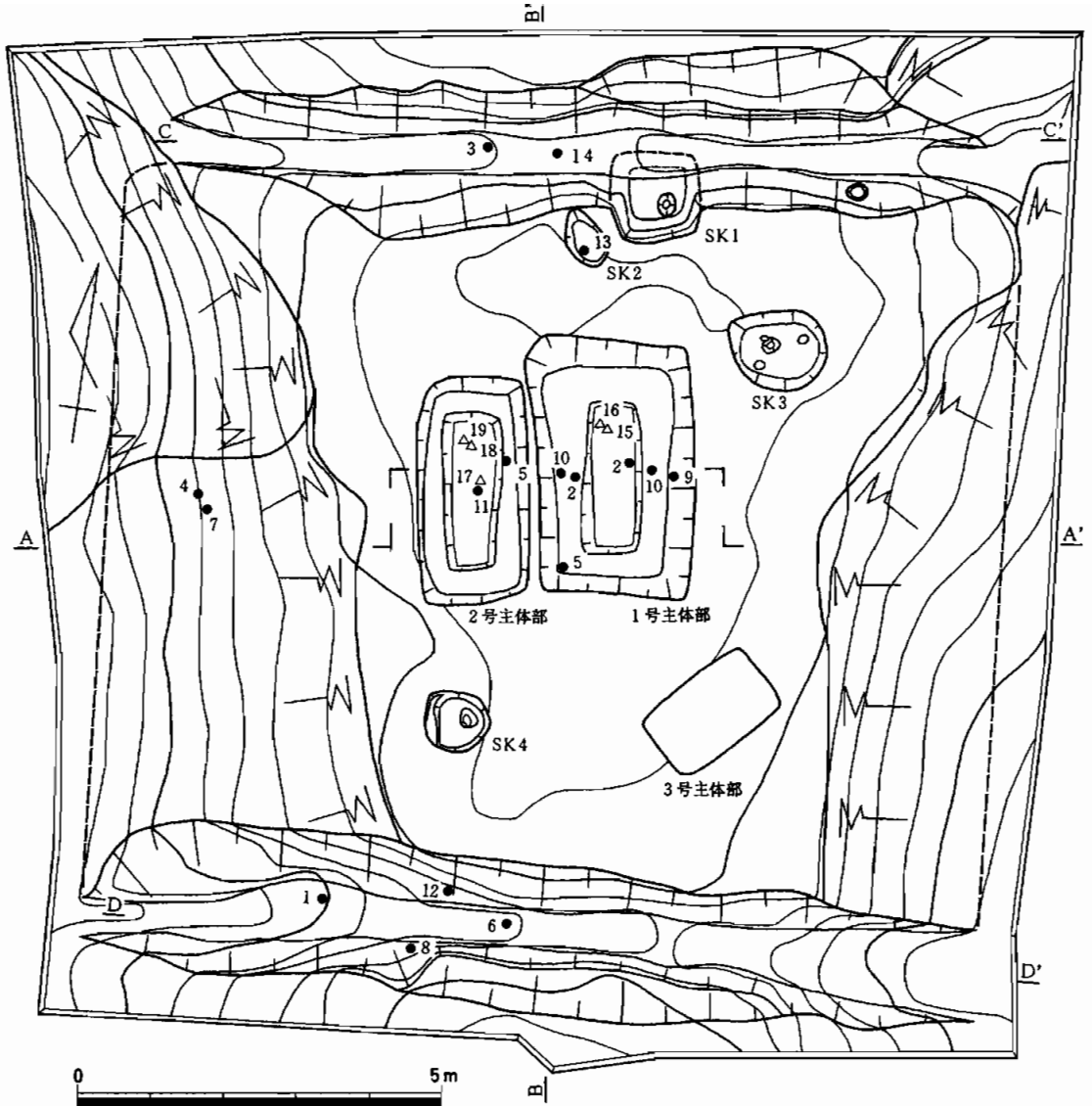
3 2号主体部鉄器出土状況（南から）

図版五 ボラ山丘陵と位置図



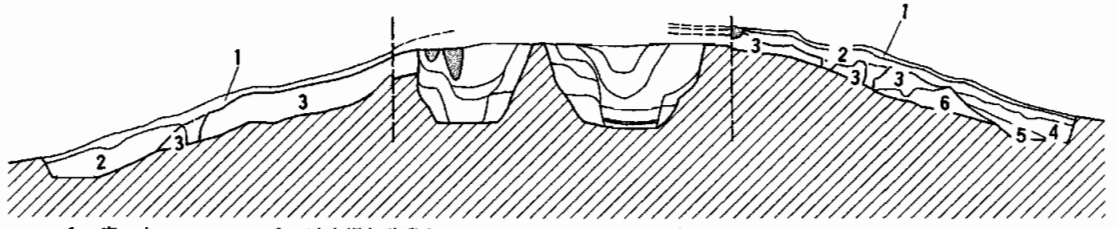
2～13はボラ山遺跡の台状墓を表す

図版六 ポラ山一号墓全体図



A

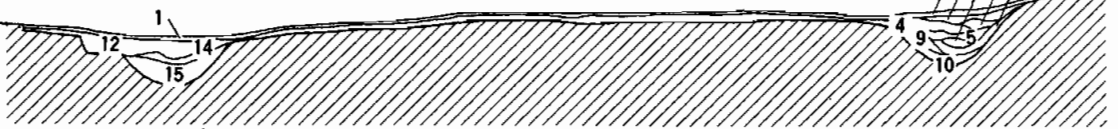
A' 144.0



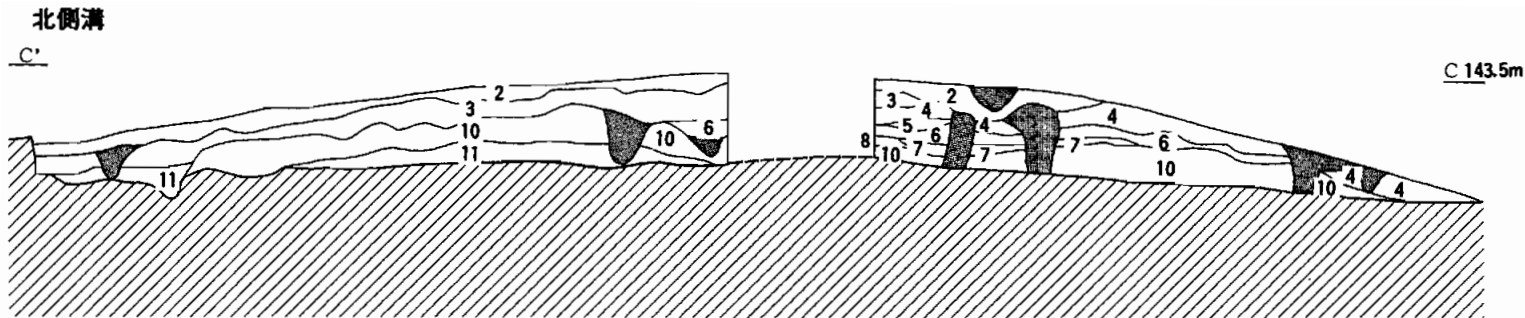
- 1 表土
- 2 暗茶褐色砂質土
- 3 暗赤褐色砂礫土 (ブロック混入)
- 4 明茶褐色砂質土
- 5 明赤褐色砂質土
- 6 明赤褐色砂礫土

B

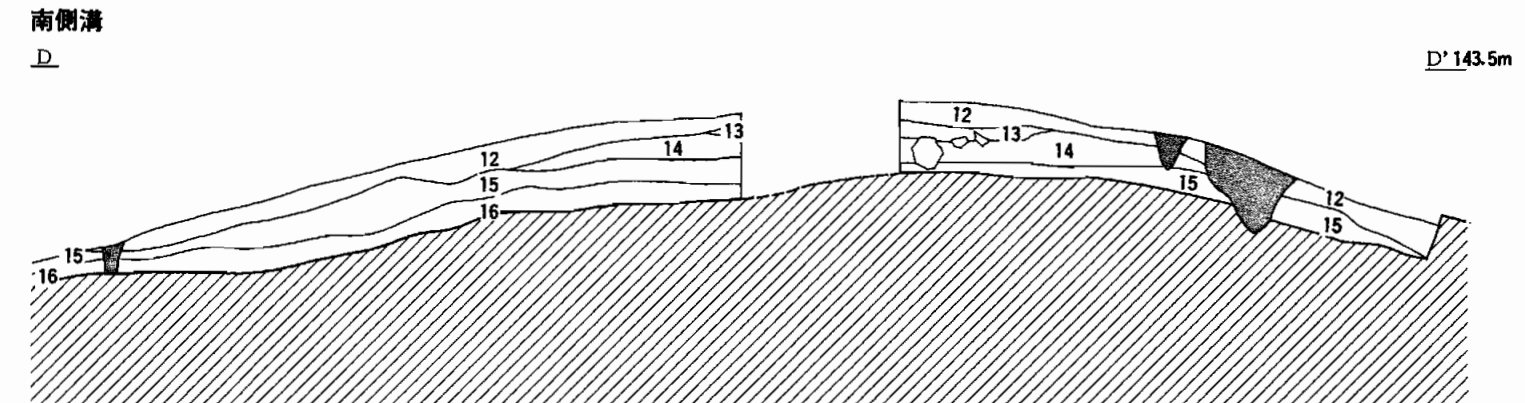
B' 144.0



- 1 表土
- 2 暗茶褐色砂質土
- 3 黒褐色砂質土
- 4 明茶褐色砂質土
- 5 明茶褐色粘質土
- 6 明茶褐色粘質土
- 7 暗橙褐色粘質土
- 8 明橙褐色粘質土
- 9 明茶褐色砂礫土
- 10 明橙褐色砂礫土
- 11 明赤褐色砂質土
- 12 茶褐色砂質土
- 13 明茶褐色砂質土
- 14 明茶褐色砂質土
- 15 暗茶褐色砂礫土



- | | | |
|-----------|-----------|------------|
| 2 暗茶褐色砂質土 | 5 灰褐色砂質土 | 8 明橙褐色粘質土 |
| 3 黒褐色砂質土 | 6 明茶褐色粘質土 | 10 明橙褐色砂礫土 |
| 4 明茶褐色砂質土 | 7 暗橙褐色粘質土 | 11 赤褐色砂礫土 |

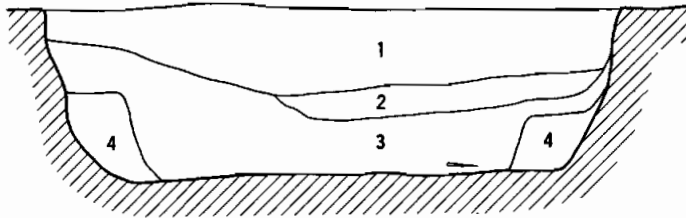
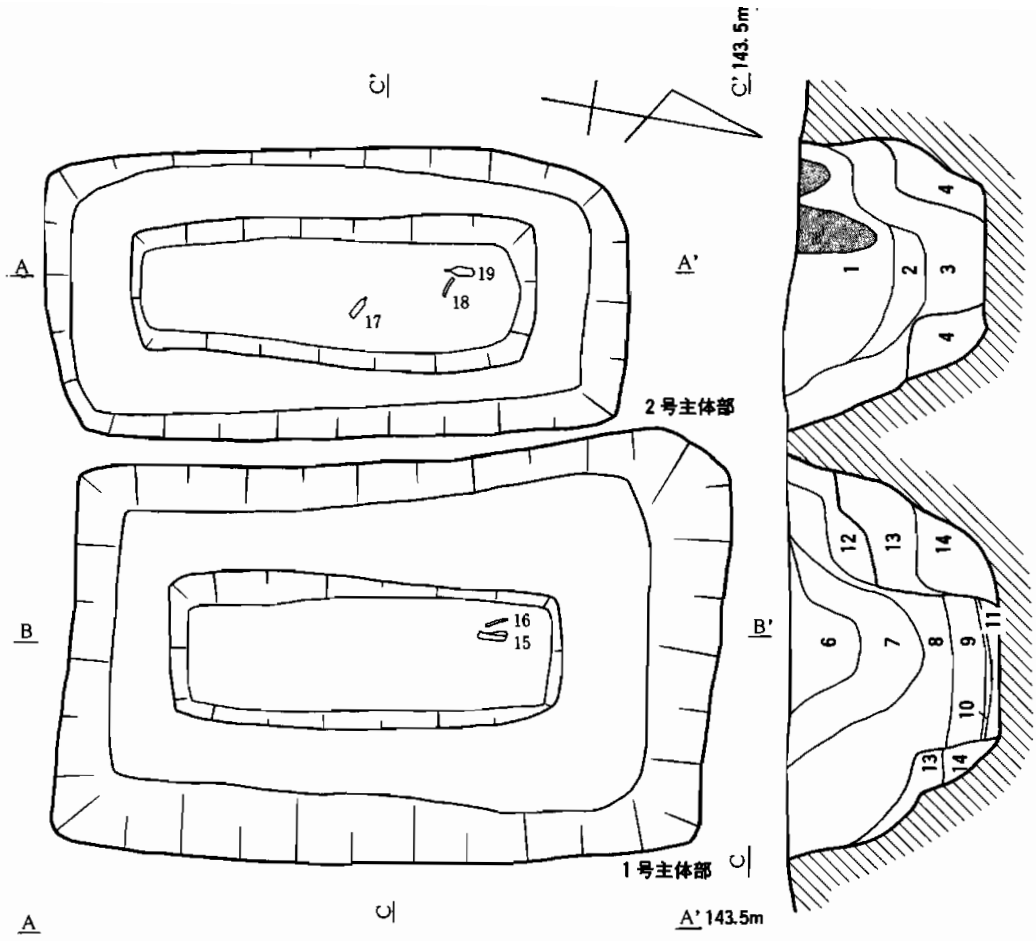


- | | |
|------------|------------|
| 12 茶褐色砂質土 | 15 暗赤褐色砂礫土 |
| 13 明橙褐色砂質土 | 16 明赤褐色砂礫土 |
| 14 明茶褐色砂質土 | |

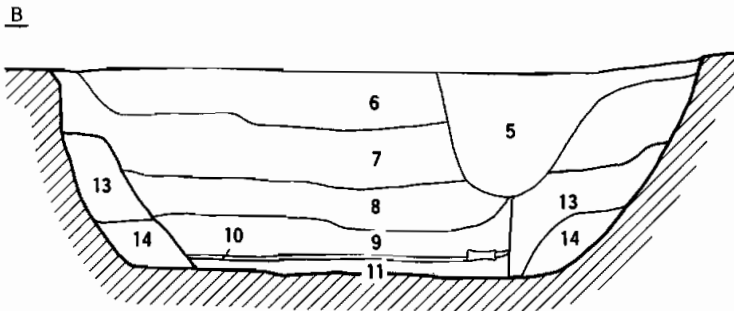


図版七 ポノ山一号墓湾土層断面図

図版八
埋葬施設



- 1 明茶褐色粘質土 (ブロック混入)
- 2 明橙褐色粘質土
- 3 赤褐色粘質土
- 4 暗橙褐色粘質土



B' 143.5m

- 5 茶褐色砂質土
- 6 明茶褐色粘質土 (ブロック混入)
- 7 暗茶褐色粘質土 (ブロック混入)
- 8 暗赤褐色砂質土
- 9 明茶褐色砂質土
- 10 明橙褐色粘質土
- 11 暗茶褐色砂質土
- 12 明赤褐色砂質土
- 13 暗橙褐色砂質土
- 14 暗赤褐色砂質土



图版九 出土遗物实测图

